
コンビニ夜話

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニ夜話

【Zマーク】

Z0041R

【作者名】

橋伊津姫

【あらすじ】

夜道のドライブで立ち寄ったコンビニ。
そこで出会った日常なうざる出来事。

『またのお越しをお待ちしております』

今宵もコンビニでは摩訶不思議な光景が
繰り広げられている事でしょう……。

第一夜 道案内

第一夜・道案内

「やつぱり、新車はいいよな。この新車独特的の匂いとかさ、堪んねーよ」

「はいはい、分かったから。ちゃんと前向いて運転してよね」
日付も変わらうかという深夜。一台の車がヘッドライトを皓々と光らせて、夜道を駆け抜ける。

車内には、一組の男女の姿がある。

「ねえ、ところで、どこまで行くの？」

助手席の女が、嬉しそうにハンドルを握る男に声をかけた。

元より、目的があつて出かけたドライブではない。あてもなく走

り回つて、女の方はすっかり飽きてしまつたようだ。

車はどうやら一般道を外れ、山の方に向かつ道に入つたように思えた。えしい光量で確認できるだけでも、周囲の様子は違つているのが分かる。

「そうだなあ。このまま行くと、山の中だし」

土地柄、そういう高い山でもない。一、二時間も走れば、越えられるだろう。

「ただ走つてんの、いい加減に飽きちゃつたよ。行くあてもないなら、もう帰ろうよ」

女の方は明らかに不機嫌になつてゐる。

「まあまあ、そう言つなよ。せつかぐの新車なんだしさ。どつか心靈スポーツとか探そづざ」

せつかぐの気分を壊されたくないのだらう。どうとか行く先を見つけて、もう少し走るうと彼女に提案する。

『心靈スポーツ』という単語を聞いて、女の方もちょっとは気持ちが動いたようだ。しぶしぶといった感じで、男の案にうなづいた。

「近くにコンビニとかねえかな？ そしたら道とか聞けるんだけどな」

「えー、ないんじやない。こんな山の中にコンビ二なんて」「そつかあ？ 案外あんじやねーの。結構、ビックリするよつな場所にあつたりすんじやんよ」

そんな事を話しているうちに、車はどんどん山の中へ入って行く。

CDの音量を上げ、山道を青白いライトの光で照らしながら快調に車は走った。まるでハンドルを握る男の気持ちが、車そのものを動かしているようだ。

音楽に合わせて小刻みにハンドルを指で叩く男の視界に、小さな灯が飛び込んできた。

「あ、あれってコンビニじやね？」

見れば確かに、コンビニエンスストアの看板だ。聞いた事のない店の名前だが、町中に良く見かけるコンビニチヨーンとは縁のない、個人経営の店なのだろう。

「あそこで道聞くついでに、何か買つて行こうぜ」
ワインカーを出し、駐車場へ向けてハンドルを切ると、シートベルトに手をかけながら女もホツとしたように口を開いた。

「じゃあ、あたしもトイレ借りてこようっと」

時間も時間だけに他に客がいる気配もなく、駐車場にあるのも自分達の車だけだ。

ドアを押し開くと、おなじみの電子音が来客を報せて鳴り響く。こんな時間に客が来る事も稀なのだろう。奥からお顔を出したのは、くたびれた雰囲気の初老の男性店員だった。

「いらっしゃいませ」

聞き取りにくい低い声で告げる。

「あの、トイレ貸して下さい」

店員に声をかけると、指差された方へ女は姿を消した。男は飲み物を購入しようと、ドリンク・コーナーへ足を進める。

眠気覚ましのためのブラックコーヒーと、連れのための紅茶を運び、レジへと向かった。財布の中の小銭を確かめながら、商品をレジ袋へ入れる店員に話しかけた。

「ちょっと聞きたいんですけど。どうかこじら辺に、『心靈スポット』とかってないですかね？ もしもあつたら、教えてもらいたいんですけどね」

支払われた小銭をレジへ仕舞つた店員が、男の言葉に顔をあげた。その表情は店の照明のせいなのか、心なしか青白く見えた。

「『心靈スポット』ですか？ そうですねえ、あんまり聞いた事はありませんが」

そんなやりとりをしていりながら、トイレに行っていた女が戻つて来た。

「ほらあ。ねえ、やつぱり帰ろ'よ」

楽しみがなくなつたと思ったのだろう。一気にテンションの下がつた女は、男の腕を引っ張つて店を出ようとする。

「まあまあ。『心靈』っていう程のモンじゃないですが、それなりの場所ならありますよ」

二人の様子が険悪になりそつなのを感じ取つたのか、店員が口を挟む。

「どこですか？」

男の方も、これ以上彼女の機嫌が悪くなつては叶わないと思つたのだろう。店員の助け舟に飛び乗つた。
「ここから、そう遠くないですよ」

そう言つて、店員は聞かれた場所までの道を教えてくれた。
「この道は一本道だから、間違える事はないと思いますけど」

聞いた限りでは、複雑な場所でもない。
三十分とかからず辿り着けるだらつ。

「ありがとう」

あまり乗り気ではないらしい彼女の背を押して、男はコンビニを後にした。

「ねえ、本当にに行くの？」

車に乗り込み、男の手から紅茶のペットボトルを受け取ると、キヤップを爪で引っ搔きながら女は言った。

「もういいよ、帰るうつよ。さすがに時間も遅いしさ」

「何言つてんだよ。せつかく教えてもらつたんだろ？ ちょっと行くだけだからさ。見るだけ見たら、帰るよ。それでいいだろ？？」

「本当に？ ちょっと行くだけだからね……」

「ああ、分かつてるって」

本当に分かつていいのかいないのか。

女はアクセルを踏み込む男を横目で見ると、ため息を紅茶と一緒に飲み込んだ。

車は再び夜の山道にヘッドライトを輝かせながら走り出した。相変わらず、対向車は来ない。

「さつきのコンビニだけど、こんな何もない場所で営業してて良くやつていけるわね」

変わり映えのしない窓の外の景色を眺めながら、女は先刻立ち寄つたコンビニの話を始めた。

「お密さんなんて、来るのかしら？」

フンフンとBGMに合わせて鼻唄を歌つていた男も、その言葉に反応した。

助手席の方へチラリと視線を流し、女の機嫌を伺つよつて言葉を発した。

「んー。でも、隣町へ向かうトラックの運転ちゃんとか、案外利用するヤツつているんじやねえの？」

「そつかなあ」

「夜中に一般の車で来るヤツがいないだけだろ？ 僕達が知らなかつただけで、配送やつてる連中には知られてる店かもよ」会話をしている二人の前に、山を下つて行く道と、それとは別に更に山の奥へ入つて行く道とが現れた。

「ここだな」

教えられた通りにワインカーを出し、山の中へ続く道を選ぶ。
かりうじて山道を照らしていた街灯の光も途切れ、ただ月光とヘッドライトだけが行く先を示してくれる。

「やっぱり、やめようよ。何だか良くない気がするし。ねえ、帰ろう、ねえってば」

深夜の山道、しかも灯りもない暗闇の中を進むにつけ、女の心に不安が押し寄せてきたのだろう。しきりと先へ行くのを嫌がった。「ここまで来て、そんな事言うなよ。もう少しで着くんだし、行ってみるだけだつて言つてんじやん」

男は内心で舌打ちしながら、女の様子を伺つた。

「だつて嫌な気がするのよ。行きたくないわ。うまく言えないけど、行つちゃいけないって思うの。お願ひ、帰りましょ」

きっと、ドライブに飽きて帰ろうと言つていいのだらう。そう考えた男の予想に反して、女は本気で嫌がつていいようだつた。

中身の残つた紅茶のペットボトルに口をつけようとせず、青い顔をして肩を抱いている。

「一体、どうしたつてんだよ」

道が暗いために、前方へ向けた視線を動かす事が出来ない。幸い、後続車も対向車もない。スピードを落すと、車を路肩に寄せてハザードを点けてサイドブレーキを引いた。

「そんなに、行くのが嫌なのか？」

彼女の顔を覗き込む。

「嫌なの。嫌なのよ、行きたくないの。お願ひ、帰りましょ」

女の表情は、これまで見た事がないくらいに青ざめ、強張つていた。

「そんな事言つたつて、もつちよつとじやないか。少し行つて帰るだけだよ。な？」

男の興味は、教えてもらつた『心靈スポット』に大いに傾いていたが、連れの尋常でない様子に迷いが生じたようだ。

それでも「せつかくここまで来たのに」との思いがあるのか、食い下がつてみる。

男の言葉を聞いた女は、キッと顔をあげてシートベルトに手を伸ばした。

「じゃあ！ そこまで言つんだつたら、一人で行つてよ！ あたしは帰るから！ ここで降ろしてつ！」

彼女の剣幕に、男はわずかにのけ反つた。シートベルトをむしり取るようにして外し、ドアのレバーに手をかけた連れをなだめ始めた。

「分かつた！ 分かつたから、そう興奮すんなよ。帰るから落ち着けつて」

今にもドアを開けて外へ飛び出しそうな女の腕をつかむと、男は約束した。

「本当に？ もう行かない？ 帰れるの？」

余程気が昂ぶつているのだろう。目に一杯の涙をためて振り向いた彼女の姿に、男の『心靈スポット』への興味が急速に萎えていった。

第一、普段の彼女は、これ程に取り乱す事などない人間だ。その彼女が、我を忘れるくらいに怯えている。

男自身は何かを感じている訳ではなかつたが、これ以上、女の神经を刺激するのは得策ではないだろう事は理解出来た。

「ああ、安心しろ。お前の言う通り、もう帰るから」

気持ちを落ち着かせるために笑いかけると、男はサイドブレーキを戻した。それを確認した女も、ホッとしたのか小さく微笑みを返す。

改めてシートベルトを装着すると、まとわりつゝ空氣を払つよつに軽く頭を振つた。

「大丈夫か？ ジゃあ、行くぞ」

暗闇の中を透かして見ても、車をヒターンさせるための路地など見当たらない。助手席の女が先に進むのを拒んでいる以上、この場

所でヒターンするしかないだろう。昼間ならいざ知らず、夜の闇の中を分岐点までバックするという方法は、絶対に御免だ。

幸いなことに車は小回りの利く軽自動車、他に車が来なければ、数回ハンドルを切るだけでヒターン出来るだろう。

気持ちが『心靈スポット』に行く事だけに向いていたので分からなかつたが、ガードレールすれすれまで近寄ると、その外は崖になつているのが見てとれた。

さほど標高のない山とは言え、けつこいつな高さだ。車」と落ちれば無事では済むまい。

時間と手間はかかるが、安全を考えて慎重にハンドルを操り、車はヒターンを完了した。

元来た道を辿り始めた車内で、女は心から安心したように大きく息を吐き出した。

「ありがとう。『ごめんね、わがまま言つて』

「もう、いひつて。行つたつて楽しめねえんじや、あんま意味ねえし」

分かれ道まで戻り、自宅のある方へと曲がる。

しばらくの間は、何となく氣まずい雰囲気が車内を漂う。そんな空気を断ち切るように、男がことさらに明るく言葉を発した。

「しかし、あれだな。いい加減こんな時間だと、腹減らねえ？」

言われて時計を確認すれば、『デジタル表示は深夜一二時近い。

「そうだね。でも、この時間じや開いているお店なんて、ないんじやない？」

「だなあ……」

自宅付近まで帰ればファミレスもあるが、これからだと店に着くのは三時頃になつてしまつ。

「うーん、これ以上遅くなつてから食べると太るよね、やつぱり」

ようやく、二人の間になつた空気が、いつもの「日常」に戻つた気がした。他愛のない会話のおかげで、女の顔にも落ち着きが見える。

「 なら、さつものコンビニに寄つて、何か軽くつまめそつたモノで
も買うか？」

「 そうだね。今から開いてるお店探すのも面倒だし。そうしようか
おにぎりでも菓子パンでもサンドイッチでも、一、二個買い込んで車の中で食べれば、家に帰り着くまでのつなぎになるだらうし、
腹もそれなりに満たされる。」

男と女は笑いながら言葉を交わし、ほんの三十分程前に立ち寄つたコンビニの灯りを探した。

だが、見覚えのある場所までやつて来ても、肝心のコンビニの看板は見えてこなかつた。

「 あれえ？ この辺だよなあ？」

「 うん、確か、この辺りだと思ひナゾ」

「 通り過ぎたとか？」

「 それはないんぢゃない？ だつて、あの木の所にある標識、コンビニ出てから見たの覚えてるし……」

女が指差して見せたのは、台風などでやられたのであらう、途中で折れてしまつた大木の幹と、そこに設置された『スピード落せ』の標識。男の記憶にあるそれは、一人が立ち寄つた店の場所がこの辺りである事を教えていた。

「 もう、お店閉めちやつた……とか？」

女が、さもありそつた事を口にした。

町中でこそ「二十四時間営業」が定着しているが、夜間は閉めている店がない訳でもない。特に利用者の少ないこんな場所では、夜間店を開けているだけで電気代も馬鹿にならないだろう。

「 まあ、そうかも知れんけど。でも、看板の電気とかも消すもんなんのか？」

スピードを緩めて、ゆるゆると車を進める。

「 あ、ね、あの柱つて、コンビニの看板ぢゃない？」

女の示した方を見れば、山道には不似合いな柱が立つていて、よく見かける、店舗の看板が乗つた鉄柱のようだ。しかし看板はなく、

アクリル製のプレートが抜け落ちた枠組だけが、光を灯す事もなくしがみついている。

「いや、だつて……。わざと来た時は、ちゃんと光つてたじゃんよ。違うだろ」「んよ。

「でも、他に見てないよ、あんな柱」

よくよく確認すれば、鉄柱の側に建物らしき影がある。前のスペースは駐車場なのか。

ハザードを出して路肩に車を停め、男はドアを開けた。

「……ここだ」

周辺を見回して、呆然と呟く。それにつられて女も車を降り、恋人の近くへ行つた。

だが、二人の前にあるのは。

古ぼけて錆の浮いた鉄柱と朽ちた鉄枠。以前には営業していたであろう、建物の残骸。

「なんで？」

「俺達、さつき寄つたよな？」ここで買い物したよな？」

昨日、今日、閉店したと言つ感じじゃない。少なくとも数年は経つている。

「だつてあたし、トイレ借りて。店員さんと話だつて……」

「そうだよ。俺、店員に金払つて、『心靈スポット』の場所聞いたじゃねえか。なのに何で、こんなんなつてんだよ！？」

男も女も、目の前に突きつけられた現実にパニックを起こしていた。

残つた外郭から、そこがかつて「コンビニエンスストアとして営業していたらしい事は想像出来た。独特的の平屋型の建物に、大きな嵌め殺しのガラス窓、店名の掲げられていたはずの枠組。すでにガラスは粉々に碎かれ、店内に放置された大量のゴミやガラクタと一緒に散乱している。

枠の中で光を放つていた電灯も今はなく、鉄の部品が時の重みに負けたかのようにねじ曲り、へし折れている。

どう考へても、先刻立ち寄つた店とイメージが重ならない。それでも、ここだ。ここなのだ。

「どうして、どうしてなの！？」

「俺に聞くなよ！　俺に分かるはずないだろ！　俺の方が聞きたいぐらいだつ！！」

ヒステリックに叫ばれた女の問いに、自身も怒鳴り返しながら男は両腕を振り回した。しんと静かな深夜の山中に、一人の声が響き渡る。

「（こ）で買ったんだよ！　何年も前の話じゃねえだろ。たつた、三、四十分かそこらの話じゃねえかよ！　なんでこんななつてんだよ！？　おかしいだろ？　おかしいよ、なあ！？」

激昂した男は、乱暴な足取りで店に　店だった廃墟に　近付いて行く。恐らく中に入つてみるつもりなのだろう。

「やめて！　もう、いいよ、帰りましょう？　こんな所に、これ以上いたくないよ。何だか分かんないけど、分かんなくていい。何も知らなくていいから、ねえ！」

振り向けば、恐怖のためか興奮のためか、涙ながらに訴えている女がいる。足が震えているのだろう。上手く体の重心を支えられていないようだ。

そんな彼女の様子に、男の頭に昇つていた血がスウッと引いていくのを感じた。次に心を支配したのは、恐怖。

目の前にある事象の不自然さに、アドレナリンの放出が止まつた脳がやつと氣付いたのだ。

「あ、ああ、うん」

途端に、体中に震えがくる。背中を向けている廃墟から、得体の知らない「何か」が今も自分をじつと窺うかがつていて、そんな、そんな気すらしてくる。

どちらからともなく走り出し、エンジンをかけ放しにしておいた車のドアを開けた。

あたふたとシートに腰を下ろし、再度ドアに手を伸ばしかけた女

が、短く悲鳴をあげた。

「ヒツ！」

何事だと目をやれば、女は口元を片手で押さえ、もう一方の手でドアを指差している。否、ドアのドリンクホルダーに入れられた「モノ」を、だ。ソレを見て、男も言葉を失くす。

「 つ！？」

ドリンクホルダーに入っているのは、目の前のコンビニで買い求めた紅茶のペットボトル。男が女に手渡し、車内で口をつけたソレは、中身を三分の一程残してホルダーに収まっている。どこかに放置されたまま、数年が経過した事を物語る有様で。

「あ、あたし、コレ、飲んだよね？」

「ああ……お、俺も飲んだ」

カラカラに乾いた口の中に貼り付いた舌を懸命に動かし、男が答えた。視線を移して運転席側のドリンクホルダーを見れば、自分で買つたはずの缶コーヒーが収まっている。

「 ぐうつ！」

思わず口を押さえる。

ホルダーに入っていたのは、パッケージ塗装とそうも剥はがれ、むき出しになつた地に錆さびが浮ふき、飲み口などは腐食ふしきょくによつて変色し朽ち果こてしまつた……空缶の残骸ざんがいだった。

「げええつ！」

堪え切れずに、胃の中の物を吐き出す。助手席側からも、女の吐いている声と音が聞えた。

あらかた腹の中になつた物を出してしまつと、男は口元を拭つて体を起こした。震える手を伸ばし、ホルダーの空缶をつかみ出す。その何とも言えぬブカブカした感触に、全身に鳥肌が立つ。気持ち悪さに耐え、手にした缶を投げ捨てた。

「そんな そんな気持ち悪いモン、捨てちまえ！」

体を二つに折つ荒い息をついていた女は、男のその言葉にカクカクと首を振つた。穢らわしいモノに触れるように恐る恐る手を伸ば

し、しかし最後の数センチを残して止まってしまった。

「早くしろっ！ 捨てんだよ！」

「でも だつて 」

「早くっ！！」

男の叫びに、女は目を閉じて大きく息を吸い込み、一気にペットボトルをホルダーから抜き取り、闇の中へ投げ捨てた。

「よしっ！ 行くからな！」

力を籠めてドアを閉めると、ライトを点ける。その光の中に浮かび上がったのは 。

「もう、お帰りですか？」

見覚えのある制服のジャケット。うつむき加減の青白い顔。生氣のない低い声。

あまりの事に、すでに声を出すことも出来ない一人の前に立つているのは、コンビニで『心靈スポット』への道を教えたあの店員だ。「ああ、せっかく教えて差し上げたのに、目的の場所まで行かれなかつたんですね？ 残念だなあ。あなた方なら、と思つたんですが」うつむいた店員の口元が、不吉に歪む。いや違う。笑つたのか？ 嘲笑つたのだ。

「なんだよ、コイツ。何、言つてんだよ？」

全身を走る震えが止まらない。気持ちの悪い汗が噴き出して来る。「あなた方がね」

ヘッドライトの光の輪、ギリギリの所に、何かがいる。その正体が何であるかなど、知りたくもない。

「仲間になつて下されば」

ギシッと車体が鳴つた気がした。ペタペタと窓ガラスに触れる音がする。

見てはいけない。頭ではそう分かっていても、確かめずにはいられない。見てしまえば、怖ろしい物がいると確定してしまう。

だが見ずにはいれは、それだけ己の中の恐怖が膨れ上がつていくのだ。

「賑やかで楽しくなると、思つたなんですが」

「う……あああああ……！」

「いやあああああ……！」

窓ガラスには灰色をした人間が張り付き、表情のない顔で一人をのぞき込んでいた。しかも、一人や二人ではない。窓と言つ窓に、ビッシリと張り付いているのだ。

まるで骨格を抜き取り、ブヨブヨとした肉の塊がギュウギュウと押し付けられているように。

「お帰りになるなんて、本当に残念です」

これは生きている人間ではない。生きているはずが、ない。

男は、息をする事も忘れて大声を挙げたまま、無我夢中でアクセスルを踏み込んだ。

猛スピードで遠去かる男女を乗せた車に向かつて、店員は深々と頭を下げる。

「またの」利用をお待ちしております

了

第一夜 金曜深夜のお客様

第一夜・金曜深夜のお客様

大学受験に失敗した俺は、人生の中で初めて挫折を知った。こう言つと、大概の人間は「何、大袈裟な事言つてくれちゃつてんの」と呆れる。

まあ、確かに。俺だつて他の人間から同じような事聞いたら、絶対にそう思うけどな。けど、俺にとつては大袈裟でも何でもない。本当の事だ。

子供の頃から俺は、大方の事は努力しなくてもこなすことが出来た。勉強も運動も、特に苦労した記憶はない。テスト前にも復習などした事はなく、それでも人並以上の成績を維持してきた。俺にとつて「出来る」という事は「当たり前」だった。

そんなもんでも、大学受験に際しても、他人のように予備校に通つたり参考書を買い漁つたり、机にしがみついて受験勉強をしたりする事はなかつた訳で。

だつて、そうだろ？ これまで、そんなの必要なかつたんだ。大学受験だからつて、いつもの自分のスタイルを崩す事はなかつた。その結果が これだ。

友人達は「現役合格する方が珍しいんだよ」と、なぐさめにもならない言葉を口にした。だが、俺には分かつてしまつたんだ。そう言つた友人が実は、腹の中で「ざまあみろ」と舌を出して嘲笑つているのが。

ああ、そうだよな。俺だつて逆の立つ場だつたら、きっとお前と同じように思つただろうよ。

浪人生活に入った俺を、両親も持て余したらしい。いや、違うか。期待を見事に裏切つた息子に対して、全ての興味をなくしてつてトコか。

まあ、あんた達にとっちや「何でもソシなくこなす息子」が自慢だつたんだろうしな。受験に失敗してウダウダと落ち込んでいる息子なんぞ、道端の石コロ程度にしか感じないんだろうよ。

俺としても放つておいてもらつた方が、気が楽だ。何のかんのと泣き言を聞かされるのも嫌だし、腫れ物に触るように顔色を窺わしながら生活していくのも、堪らない。

親の興味はすでに妹に移っていたし、息苦しい空氣の流れる家で暮らすのにも嫌気がさしていたから、思い切つて俺は家を出る事に決めた。

どうせ大学に入つたら、一人暮らしあうと思つてたからな。

両親は俺が家を出る事を、あつさり許してくれた。と言つよりも、俺が何をしようがどうでもいいらしい。

さして多くもない荷物をまとめ、俺は長年住んだ家を出た。特に何の感慨も湧かない。重い空氣の流れる家から解放され、ようやく新鮮な酸素を深く吸い込んだ気分。強いて言つなら、そんなトコロか。

そんなこんなで、この町に引っ越して来てから二ヶ月程が経過していた。

最初の一ヶ月は何をする気もせらず、思い出したよつて引つ越しの荷物を片付け、ただダラダラと過ごしていた。

新居に選んだ安アパートの外に出るのは、食事をする時と細々したモノを買い出しに行く時だけ。「コヤ、俗に言つ「ひきこもり」つてヤツか?

まあ、そんな生活が長続きするはずもない。第一、生活するための金がない。

実家にいる時は親の金で暮らしていけたからな。ひきこもつて暮らすにも、先立つモノがなければ、いかんともしがたいと言つていいか。

三ヶ月目に入ると手持ちの金も、そろそろ底を尽き始めた。さすがに、ヤバいか。

そう思つていた矢先、弁当を買うために良く利用するコンビニが夜間バイト募集の貼り紙を出しているのに気が付いた。

元々が夜型人間だから、夜中に起きているのは苦にならない。学生と違つて昼間学校へ行く必要がないから、その間タップリと睡眠を摂る事が出来る。

うちからも歩いて通える場所だし、条件はバツチリだ。

早速、顔見知りになつていた店長に話をつけ、翌日の午後に面接を受ける事になつた。店で食事用の弁当と履歴書を購入して帰宅する。写真は確か、受験の時に撮影したバストシヨットがあるはずだ。翌日の午後二時、約束通りに面接に向いた。店員に話をすると、店長が待つていると事務所に通される。

コンビニの事務所つて、結構、狭いのな。それなりにスペースはあるんだろうけど、ファイルの納められた棚やら在庫やらで占められているので、見た目以上に狭く感じるのかも知れないな。

「失礼します。よろしくお願ひします」

発注作業の途中だつたのか、俺の方へ視線だけを動かした店長は「そこに座つて、ちょっと待つてくれ」と告げた。

物珍しさも手伝つて、俺は事務所内をキヨロキヨロと見回しながら、店長の隣にある椅子に腰掛けた。

ふと目をやると、机の上には防犯カメラのモニターが置かれ店内の様子を映し出している。

へえー、こんな風に店内を見てる訳か。

レジカウンターで会計をしている親子連れや、雑誌コーナーでマンガを立ち読みしている職人風の若い男、タバコを購入するためだろうか、ズボンのポケットをゴソゴソと探りながら入つて来たサラリーマン。

いつも見ている光景と大して変わらないのに、モニター越しになると、途端に現実味を失うものなんだな。

妙な事に関心していると、作業を終えたらしい店長が声を掛けて来た。

「いや、お待たせしました。済まないね」

「いえ、お忙しいのにお手数かけます」

カバンの中から履歴書を取り出し、店長に手渡す。

「夜に入ってくれてたバイトさんが急に辞めちゃってねえ。困つてたんだよ」

書類に目を通しながら、夜バイトの子つて長続きしないんだよね、どうしてかなあ等と店長は呟いている。

「夜間のバイトって、そんなに大変なんですか？」

そんなに人の出入りが激しいって、どんだけ仕事があんだよ？ ちょっと不安になつて、俺は店長に聞いてみた。

「基本的には、接客と商品の陳列だね。ただ昼間と違つて一人だから、ちょっと大変かも知れないけど。それでも、他のコンビニに比べてキツイって事はないんじやないかなあ」

夜中に何度も利用した事があるけど、店長が今言つた以上の仕事があるとも思えない。

「じゃあ、木下君。慣れるまでの一週間は、夕方五時から十時のシフトに入つてもらおうかな。覚えてもらわなくちゃ、いけない事もあるからね。で、様子を見て夜中のシフトに移つてもうつかい」

「はい、分かりました。よろしくお願ひします」

顔知つていてるのに、改めてこうやつて名前を知るのも、何だか変な気分だねえ。そう言って笑つている店長に頭を下げた。

シフト表は、翌日の昼までに作成しておくから、それ以降取りに来るようになつたので帰る事にする。

んな訳で、夕方五時から十時までの間、俺はコンビニでバイトするようになつた。

これまでバイトなんてした事はなかつたから、どうなることかと思つたけど、そこはそれ、俺つてば要領はいい人間だからね。

作業内容の引き継ぎとかレジの操作法とか、そんなモノに関しては全く心配していなかつた。実際、一回説明を聞けば大まかなトコ

口は理解出来たしな。

俺は気にしていたのは、人付き合いの方だ。大概の事はそつなくこなす俺だか、どう言う訳か、円滑な人間関係を構築するのは苦手だった。

俺は普通に接しているんだけどな。周りの人間にとっては、鼻持ちならないヤツだと映るらしい。

家を出て新居を決めるにあたり、これまでの俺を知る人間がいいな事。それを第一条件にした。今更、俺の事を知っている連中の近くで暮らしたくない。

だから、このコンビニに買い物に来る客の中にも、バイトに入る人間の中にも、俺を知っているヤツはいない。

ここでの俺は「常連客から夜バイトに入った木下君」だ。今の俺にとって、それだけで充分だ。

学生時代特有の馴れ馴れしさはなく、適度に距離を置いた人間関係は、とても心地良い環境だった。

「木下君、そろそろ棚の方、見てもらつてもいいかな？」

俺の指導係になったのは、去年からこここのコンビニでバイトしていると言う笠村さん。俺より二つか三つか年上か? 気さくで面倒見のいい人だ。

「はい」

店のカゴを手にして、俺は弁当コーナーの商品をチェックした。

この店では、夜の十一時に最終の納品が入る。陳列は夜中バイトの仕事だが、それまでに消費期限、賞味期限をチェックしておかなくてはいけない。

「木下君てさあ、この辺出身の人?」

棚を覗き込んでいる俺に向けて、レジで小銭の精算をしていた笠村さんが声をかける。

六時頃から九時前までは断続的に客が入るので、割と忙しい。だ

が九時半を回ったこの時間帯は、客足も落ち着きホッと一息つける。

「いえ、三ヶ月前に越して来たんスよ」

「そつか。じゃあ、新市民さんだな」

そう言つて、俺の方を見てニカツと笑う。色々、根掘り葉掘り聞かれるのかと思って身構えていた俺は、その表情にちょっと肩透かしを食らつたような気がして、どんな顔をしていいのか困つてしまつた。

「来週から夜中のシフトに移るんだって?」

「ええ。元々、夜中のバイトに募集かかってたんで。ですから、 笹村さんと一緒にシフトつて、今週一杯なんスよ」

弁当のパートナーから惣菜の棚に移動する。

「こないだ辞めちゃった小倉さんの交代要員か

「何だか、急に辞めちゃったとかで、店長もずい分困つてたみたいスね」

「んー、まあね。小倉さんの気持ちも、分からぬいでもないけどなあ……」

「 笹村さんにしちゃあ、珍しく歯切れが悪い。

「店長と折り合つて悪かったとか?」

「あー、そう言つのは、ちょっと違つんだよねえ」

何だよ、気になるな。更に詳しく聞き出せつとした時、来客を告げるチャイムが鳴つた。

「いらっしゃいませー」

それに呼応するように、店の電話が鳴る。

結局その時は、 笹村さんに話を聞けないまま終了の時間を迎えた。時計の針が十時を回ると、夜番に入るためにやつて来た店長と交代する。俺のお試し期間が終わるまでは、店長が夜番に入つてているらしい。

店内の床をモップ掛けしていた店長に挨拶して、仕事は終わり。ポケットの中の小銭を確認し、自販機で缶コーヒーを買つ。商品を取り出せつと体を屈めた時、背後で自転車のブレーキ音がした。

「 笹村さん、お疲れ様でした」

振り返ると、自転車にまたがつた 笹村さんが俺を見ていた。

「木下君さあ、出来るなら金曜日の夜のバイト、入らないよつじた方がいいよ」

そう俺に言つた笹村さんの表情は、とても[冗談で言葉を返せる程軽くはなかつた。

「金曜日……ですか？ 何でなんです？」

俺の質問は、もつともだろう？ だって具体的な話は、全然出来ないんだぜ？

「金曜日の夜番……入るなつて言つたつてなあ。辞めた小倉さんつて人の代わりなんだろうから、そう言つててもいかんだろーし」遠くなつて行く笹村さんの後ろ姿を見送りながら、俺は独りごちた。

「じゃあ、木下君。来週から夜番、頼むよ。これ、シフト表ね」研修期間と告げられていた一週間。俺は店長からシフト表を手渡された。

細かい文字がプリントされたコピー用紙に視線を落せば、「木下」と記された欄に付けられた印は、水曜、木曜、そして金曜。

「 金曜……ですか？」

笹村さんから聞いた話が、脳裏に甦る。

「ん？ 金曜がどうかした？ どう言つて訳だかね、ここのスタッフは皆、金曜に入るの嫌がるんだよ。やつと引き受けてくれた小倉さんも急に辞めちゃつたし。本当に困つてるんだよねえ」

店長は銀フレームの眼鏡を指先で押し上げながら、木下君、何か知つてる？ などと声をかけてくる。

『金曜日の夜バイト、入らない方がいい』

笹村さんは、そう言つていた。

きつとこれまでにも夜番に入ったバイトの人達から、店長に何かしらの相談があつたんじやなかろうか？ けどまあ、俺だつて漠然とした情報しか持つてないしなあ。俺の方が教えて欲しいくらいだつて。

「いえ、別に何も知りませんよ。俺、越して来てから、まだ口も浅いです」

「そつかあ。そうだよね。それじゃあ、よろしく」

着替えて店に出ると、先にシフトを知られたバイトの女性が俺を見ていた。まあ、何とも形容しがたい表情で。

「木下君、金曜入るんだ?」

小声でかけられた言葉に、俺も思わず小声で返してしまつ。

「そうみたいつスね。そもそも、小倉さんの代わりなんだ、当たり前つちやあ当たり前なんスけどね」

立ち話をしている訳にもいかない。俺は床にモップを掛けながら、彼女は棚を整理しながら会話を交わす。

「木下君、これ……」

制服のポケットから小さなお守り袋を取り出して、俺の方に差し出してくれた。

「本当はね、小倉さんにあげよつと思つてたんだけど。渡す機会がないまんま、辞めちゃつたから。代わりにもらつてくれる?」

お守り? 何でンな物が必要なんだ? ツツコミたい部分は大きいあるが、せつかくの好意を無にして人間関係を崩したくはない。朱い小さな袋に入れられたお守りを、俺はジーンズのポケットに仕舞つた。

その日は十時の上がり時間が来るまで、色々と考えた。

金曜日の夜間バイトを、皆が気にするのは何故なんだ? 店長はその噂の実態を知らないようだけど、従業員達の間では暗黙の了解と言つか、共通の「禁語」として漫透しているらしい。

しかも「お守り」なんてアイテムまで飛び出してきた。何だつてんだ、一体?

あの笹村さんの意味深な発言。お守りをくれた女性の顔。この店に何があるってんだ?

まあ、いざれにせよ、金曜の夜になれば分かる事だ。皆が気にする「金曜日」になれば。変な話だけど、俺の中には「金曜日の夜」

を楽しみにしている気持ちをえ、あつた。

水曜の夜、木曜の夜。何事もなく、俺はバイトをこなす。自分の都合で夜更かしするのではなく、決められた時間、決められた作業を行わなくてはいけないと言つのは、思いの外、体力的にくるものだつた。

まだまだ緊張しているのもあるのかと感じたが、「緊張」という二文字こそ、自分には最も縁遠いモノだつたと思い出して苦笑する。そんなら単純に、一人でやる作業量が増えたり、これまでの生活スタイルが変わつたりした事から来る疲れなんだな。

朝六時。早番バイトの店員と交代すると、眠気が満タンになつた体を引きずりアパートへ戻る。「りや、自転車でも買うか? けど店まで五分程度の場所だしなあ。

ボンヤリとそんな事を考えているうちに、自宅である安アパートの敷地に入る。上着のポケットを探り、取り出した鍵で玄関を開ける。出かける時に閉めたままにしておいたカーテンのために、差し込む光はわずかで、部屋の中は薄暗い。

滅多に陽に当てる事もないため、冷たく固い布団にもぐり込み、食事もそこそこに夢の中へダイブする。まあ実際には、夢も見ない程なんだが。

バイトを始めてから、自分ではこれまで感じた事がないくらい、生活が充実していた。

大概の事は苦労しなくとも出来てしまう。それは裏を返せば、自分がやる事に達成感も充実感も得る事はないって話になる。

本人にとつても周囲にとつても、出来るのが当たり前。だから俺には、「何かに向かって努力する」なんて事はなかつたし、努力してまで為したい「何か」に出会つた事もなかつた。

今だつて、その「何か」を見つけた訳じやなかつたけど、それでも「自分の手で稼いだ金で生活する」つてのは俺にとって、新鮮で満足出来るものであるのは事実だ。 とは言え、いくら安アパー

トであつても、週二日のパソコンバイトで全てをまかなえるはずもない。

とりあえず現状はしのげるかも知れないが、先々の事も考へないといけねえんだろうな。

目覚まし代りの携帯が、枕元でうるさく自己主張している。音のしている辺りを手探りすると、指先に堅い感触。まだほとんど機能していない頭のまま、アラームを止めて時刻を確認する。

大きなあぐびをして、ボサボサになっている髪に手を突っ込んで頭をかくと、ノソノソと布団から這い出した。

結局、メシも食わずに寝こけてたんだな。とりあえず、熱いシャワーでも浴びて頭をスッキリさせよう。

狭い風呂場で熱い湯を頭から浴びると、幾分か意識がハッキリする。

今夜だよな、問題の「金曜日の夜」ってのはさ。一体、何が起きるってんだろうなあ？

手早く着替えて、脱ぎ散らした服を洗濯機に放り込もうとした時、ジーンズから何かが落ちた。足元のソレを拾い上げて見れば、数日前にもらったお守りだった。

『小倉さんにあげようと思つてたんだけ』

これをくれたバイトの女性は、そう言つていた。て事は、お守りが必要になるようなイベントが発生するつて訳だ。

手にしたソレを、シャツの胸ポケットに仕舞つたのは、何か深い考えがあつての事じやない。なんとなく そう、なんとなく、だ。残り物で食事を済ませると、上着を羽織つて部屋を出る。五分も歩けば……もう店だ。

「おはようござこます」

一台あるレジのうちの左方でレジ締めをしていた 笹村さんに、まずは声をかける。

数えていた小銭の山から顔を挙げ、 笹村さんは俺の姿を認めて返

事をしてくれた。

「ああ、おはよーいりやれこまか」

「朝の挨拶は『おはよーいりやれこまか』程、俺を困惑させるモノはなかつた。」

挨拶の何たるかを学ぶ時、まず、そう教わるだろ? いくら、その日のうちで一番最初に顔を合わせるからって、夜の十時に出でくる挨拶が「おはよーいりやれこまか」つて。

誰かに聞いた話だからウロ覚えだが、とある業界のどつかの社長が言い出したらしいよな。朝晩の挨拶の中、「いざこます」と丁寧語で表されるのは「おはよーいりやれこまか」だけだから。なんだそうだ。

んー。まあ、一応納得……かな? 違和感がなくなる訳じゃないけど。

「ハンドルの制服に着替え、ハンドル袋を手に店の表を掃除しながら、ついつらとそんな事を考える。いろんな、ひとつでもいいような事を大真面目に考えるなんて。どうやら俺は、自分で自覚している以上に「金曜日の夜バイト」を気にしているらしい。

ハンドルをまとめて所定の場所に置いて、店内に戻る。笹村さんとレジを交代し、接客をする。何も変らない、いつものバイトの風景。金曜日だからと言つて、客の入りに差がある訳じゃない。

いや、あるか。翌日から休みになる学生が、雑誌コーナーで立ち読みをしたりする数が多いし、これから出掛けるのであらう着飾った女性客も多い。

あつとこつ間に、納品の時間がやつてくる。これだつて、いつもより多い。レジが落ち着いた時間を見計らつて、商品を棚へ並べていぐ。

気が付けば、すでに日付けは変つていた。何だ、別におかしな事なんてないじゃんかよ。あんなに意気込んで、馬鹿みてー。

店内にはチラホラと客の姿が見える。レジ奥の煙草を補充し、空になつた段ボールをたたんで外に出す。

時計の針が午前一時半を回る頃には、三人程あつた客の姿もなくなり、静かな店内にはスピーカーから流れる音楽だけが響いている。うしつ。今のうちに少し休憩しつく。店内を見回し、客の姿がない事を再度確かめる。

一人しかいないから、トイレに行くのにも気を使つ。さすがに、客がいる時にトイレに行くのは、はばかられるよなあ。

ゆっくりとトイレに入つて用を足し、せつぱりした気分で店内に戻ると同時に、来客を告げるチャイムが鳴り響いた。

「いらっしゃいま……せ……」

反射的に声をかけて入口の方へ顔を向けるが、自動ドアが開いた気配はない。もちろん、人の姿もない。

「何だ？ センサーの誤作動か？」

ごくまれに、自動ドアの外の人影などに反応する事があると聞いた記憶がある。きっと、それだろう。気にしない、気にしない。

気持ちを切り替えようとすれば、今度は菓子コーナーの袋入スナックが音を立てて棚から落ちた。積み方がマズかったのか見てみれば、ソレは一番上の棚ではなく、一段目の棚から落ちていた。

何かの弾みで落ちるような場所ではない。現に、他の商品はキチンと所定の位置に収まっている。どう考えたって、自然に落ちるようなモノではない。

手にした袋を棚に戻す。と同時に、今度は雑誌コーナーで音がする。目をやれば、平積みにされていたはずのマンガ雑誌が崩れ、床に散らばっている。まるで誰かが、わざとそうしたようだ。

こんな事が起こるはずがないんだ。なぜなら、崩れた雑誌の山は通路手前側に積んであつた山ではなく、その奥にあつた山なんだから。

「何だ？ 何が起こってるんだ？」

散乱している数冊のマンガ雑誌を直していると、再び来客を告げるチャイムが鳴る。心臓に悪い程の音量で響くその音に、ビクッとしながら顔を擧げる。

もちろんそこには、誰もいなかつた。自動ドアも閉じたまま。俺は全身に鳥肌が立つのを感じた。

これだ。これが「金曜の夜にはバイトに入らない方がいい」と言われる原因なんだ。そう気づいた途端、店内の温度がグンと下がったような気がした。足元から気持ちの悪い震えが上がってくる。呆然と立ち尽くしている俺の耳に、店内を歩き回る足音が忍び込んできた。せかせかとした足音ではない。ひどくゆっくりとした……そう、足を引きずるようにして歩く音。

今、レジの前にいる。ソレは耳障りな音を立てながら移動している。

あの棚の角を曲がれば、俺まで一直線だ。そう思った瞬間、三度、対人センサーがチャイムを発した。ハツと我に返る。いる。あそこに、いるんだ。

意識が脳に命令する前に、体の方が先に動いた。

拾い上げたまま持っていた雑誌を放り出し、事務所へ駆け込んだ。もしかしたら、何事か叫んでいたかも知れない。

積み上げられた在庫の段ボールに背中を預け、俺は荒い息をついた。

今のは何だ？ 一体、何がどうなつてているんだ？ 誰が店の中を歩き回っているんだ？

バクバクと暴れている心臓と呼吸を落ち着かせようと試みる。客は誰もいなかつた。それは確かだ。大きな店舗ではない。たかだか、コンビニの店内だ。人がいれば、目に付くはずだ。

もしかして、棚の間、通路に隠れていたのか？ しゃがみ込んでいたとすれば……そして、身を屈めたまま移動していくとすれば、それなら、俺の視界に入らないと言う事も、可能かも知れない。何のためにそんな事をするのかは知らないが、絶対にあり得ないとは言い切れない。いたずらして、俺を驚かそうとしたのかも。

そう考え付くと、今度は腹の底から怒りが涌き上がってきた。隠れていた誰かは、慌てふためく俺の姿を見て笑っていたに違い

ない。さぞかし、面白い見せ物だつたろうよ！

俺の視界の端に、店内の様子を映し続けているモニターが入つた。

そうだ、これなら。

あれから対人センサーの音はしていない。だとしたら、俺をハメようとした誰かはまだ、店の中にいるつて事だ。

くそつ！ どこのどいつだ？ 面、見てやる！

無機質なスチール机の上に置かれた、平面な箱。淡々と店内の様子を映し出しているその画面に、俺は張り付いた。

レジ前、雑誌コーナー、ドリンクコーナーと視線を移す。
どこだ？ どこにいる？ どこに隠れた？

ふと違和感を覚えて、目を凝らす。アイスのケースの陰だ。見て
いると、何かが動いているような気がする。

そこか。そこに隠れているのか。

事務所から飛び出そうとした俺の目の前で、アイスケースの陰に
いた何モノかが大きく動いた。

よし、顔を見てやる。出て来い！

モニターの前で、俺は両手を握り締めて待つた。

もぞり……

と、ソレが動く。

もぞり……

と、モニター越しでも音が聞こえてきそうな動きで、ケースの陰から姿を現した。

「 う……あ……」

思わず、声がもれる。

店の通路を這いずつているアレは……。

女、だ。年は俺と大して変わらないだろう。四つん這いになつて、

ズルズルと体を引きずつている。

長い髪はざんばらで、影になつた表情までは読み取れない。所々
破れた服は、土にまみれ、血液らしき染みで汚れている。その先か
らのぞく両足、あり得ない角度に折れ曲がり、どす黒く変色してい
る。

あの状態では立ち上がる事はあるか、わずかな重みですらかけら
れはしないだろう。

乱れた前髪で隠された目は、どこを、何を見ているのか分からな
い。

アレが……アレが、さっきの音と気配の正体。

だめだ……。頭のどこかで警報が鳴り響いている。このまま、ア
レを見ているのは、良くない。

俺の体から切り離されてしまつたかのよう、必死に警告を発し
ている意識。だがそれに反して、身体は縫い止められているように
動かす事が出来ずについた。

モニターから田を逸らす事が出来ない。息をひそめて、画面に見
入る。

床の上を這い回っていたモノが、ふと動きを停めた。何かに気付
いたように顔を擧げる。店内に設置された四つのカメラ。長い前髪
の奥にある田は、そのうちの一つを見ている。

こちらからその表情をうかがう知る事は出来ないが、アレの目は
間違いなく、このカメラを捉えている。俺が見ている、このカメラ
を。

すぞつ……

と女が動いた。先程までの緩慢な動きではない。明らかに田指す
何かを発見したモノの動きだ。

ぞぞぞぞ……

両足が使えないとは思えない速さで床の上を進み、カメラのフレームから消えた。

どこだ？ どこに行つた？ また、棚の陰にでも隠れたのか？ 慌てて画面のあちこちに視線をさまよわせていると、突然モニターにノイズが走つた。

「おい、何だよ？」

モニターの乱れに、思わず声をあげ、壊れたテレビにするように両手でバンバンと叩く。

見たい訳ではない。目にしても不快になるだけだ。でも、見えなければ見えないで、ひどく不安になる。

乱れた画像に忙しく視線をやりながら、モニターを叩き続けていると、始まった時と同じようにいきなり画面が戻つた。

「あ 直つた……」

ホツと息を吐く。そして気付く。

違う。さつきまで見ていた映像とは違う。通常なら、店内四つのカメラで撮影している映像を、四分割された画面で映し出している。だが今、映し出されているのは……。アイスのケースから続く通路と商品棚。先程まで、あの女が映っていた画面。その画面だけが、モニターに大映しになつている。

何が起こつている？ 分からない事が多過ぎる。分からぬ事だらけだ。

どうする事も出来ず、ただ呆然とモニターを見ているしかない俺の目に、動くものが入つてきた。

画面の下から、細長い何かがせり上がつてきている。粒子の粗い防犯カメラの画像の中でも、ソレの病的な白さは見て取れた。

血の氣の全くない、青白い、まるで死人のような 指。何本かは、あらぬ方向へねじ曲がつて いるその指が、ゆっくりとモニター画面を這い上がって来る。それに続いて盛り上つてくる、黒い髪。

『…………ネエ……』

耳の奥に、粘り付くような声が響いた。思わず耳を押さえて辺りを見回す。だが、部屋の中には俺しかいない。

『ネエ……聞コエテルデシヨ？』

聞き間違いやない。鼓膜の直前で発生したんじゃないかと思われる、空気を震わせない声。耳から入り込んで脳内をかき回し、背骨に沿つて冷たい空気が流れしていくような、嫌な声。

治まつていたはずの鳥肌が、再び全身に広がつていくのが分かる。室内の温度が、グンシ、と下がつた気がした。

『ネエ……アナタ……』

抑揚のない、不気味な声がまた聞こえる。と同時に、画面上にマツと頭が現れた。

油気の抜けたバサバサの前髪の間から、表情のない眼がこちらを見ている。

「 つ！？」

血走った白目、灰色に濁つた瞳。キロキロと動くソレが、息を飲んで立ちつくす俺を捉えた。ヤバイと思ったが、もう遅い。

『イイイイタアアアアアア』

にあ、と笑つた目が三日月のように細くなる。俺と女の視線がガツチリと絡み合つ。

『アナタ、アタシト、オンナジ……』

カメラのレンズを引っかいているのだろうか、爪を立てて女の指先が動く。

『アタシト、オンナジヨウ』

何が 何が同じだと言つんだ？

女の視線の呪縛から逃れられないまま、俺は頭の隅でわずかに考えた。少しでも気を抜くと、そのまま意識を持つていかれそうだ。とにかく、思考するんだ。脳裏に浮かぶ事柄に必死にしがみ付く。

『ドウシテ？ ドウシテ、アタシヲ受ケ入レテクレナイノ？ アタシトアナタハ、オンナジナノニ』

女の顔に嗤い以外の強い感情が表れた。苛立ちだ。

知った事か！俺には、こんな奴と同列に扱われる心当たりなんか、ねえぞ！

モニターの中から俺を睨み付けていた女の手が動く。カメラに顔を近付けたのか、画面一杯に女の濁った両目が映し出された。

『アタシトオンナジクセニ。ドウシテ、アナタハ生キテルノ？ オカシイワ。ソンナノ、ズルイ。アタシトオンナジクセニ』

先程と同じ事を繰り返しながら、女の目が近付いて来る。と、再び画面にノイズが走った。だがその乱ればすぐに治まり、女の輪郭がより鮮明に、より立体的になつた。

「つづ！？」

モニターの置かれた机から離れようとした弾みで、椅子のキャスター部分に足を引っ掛け、無様に転んでしまつ。深夜の事務所に騒々しい音が響き渡つた。

顔が……女の頭部が、狭いモニターの枠から出てこようとしている。

ラップか薄いビニールの膜に顔を押し付け、無理矢理引き伸ばせば、丁度こんな感じになるだろつか。

わずかな隙間にねじ込んだ女の右手が、画面を突き抜けて俺の方へ伸ばされる。いびつに歪んだ指が、空を掴もうと蠢く。部屋の中一杯に、強烈な異臭が充満した。

「ぐうづ……」

鉄錆じみた臭い、肉の腐つた臭い、すえた汗の臭い、時間の経過した衣服の臭い。それらが混じり合い、濃縮されたみたいな、堪らなく不快な臭氣。

モニターから抜け出そうとする女が動くたびに、臭いが強くなる気がした。あまりの臭気に胃液が逆流する。鼻と口を手で押さえ、もつれる足を支配しようと懸命になるが、まるで脳からの指令を否定する如く、思い通りには動かない。

ただやみくもに、床や椅子、机の脚を蹴るばかりだ。

すでに女の頭部はモニターから完全に抜け出し、肩の辺りまで現れていた。自由になつた首を巡らし、床の上でジタバタしている俺を見下ろす。

『ドウシテ、アナタハ生キテルノ？ アタシトオンナジナノニ。ズルイワ、ズルイ』

女が口を開くと、異臭は耐え難いものになる。膜がかかつたように白濁した目が、俺を捉えて離さない。

「う……あ……あああああつ……！」

女の肩が、ぐぬりつ、とモニターから抜け出たと思うと、あり得ない長さに上半身が伸びた。ねじれた指が俺の方へ向かつて来るのを見て、麻痺していた喉から、ようやく声を出す事が可能になつた。

『ネエ、アナタモ逝キマショウ。アタシト同ジ所へ。生キテイタツテ、仕方ナイデショウ？ イイ事ナンテ、何モナイジャナイ』

腰から下は、まだモニターを抜けてはいない。だが女の体は、柔らかいゴムか何かで出来てゐるみたいに、床の上にいる俺の方へ伸びてくる。

「く、来るな！ 来るなあ！！」

言う事を利かない両足を拳で叩き、叱りつけながら動かし、どうにかして女から逃げようと試みる。

『ドウシテ逃ゲルノ？ ドウシテ生キテルノ？ アタシト同ジクセニ！ アナタダケ、ズルイジャナイ！』

俺を見ている女の目が吊り上がつた。鉤爪の形に曲げられた両手が、体でも衣服でも、捕えられるモノを求めてゐる。

『アタシト同ジクセニ生キテルナンテ、ズルイ！ ズルイズルイズルイズルイズルイズルイイイイイイイイイイイイ！ ツ！…』

「うあああああ つ！！」

足を動かした拍子に、ズボンの裾が女の手の届く範囲に入つてしまつた。そのチャンスを相手が見逃してくれるはずもなく、想像以上の素早さで、俺のズボンの布地を掴んだ。

数本の指があらぬ方を向いていふとは思えない程に強い力で、ガツチリと布地を掴んで離さない。

「離せよ！ 離せ！ 触るな！ 離せよ！ 離せつてば！」

壊れたCDのように同じ言葉を繰り返しながら、女の手を蹴りつけた。だが、そんなものではビクともしない。ジーンズの生地を伝つて、上半身へにじり寄つてくる。

『ズルイズルイズルイズルイ』

女の顔に浮かぶのは、嫉妬と羨望、そして憎悪。渦巻く負の感情が、掴まれた箇所から俺の内側へ流れ込んで来るような気がした。

「う……うあ……ああ……」

体の芯が冷たくなつて、痺れてくる。頭がジンとして、何も考えられなくなつていく。全身から力が抜け、ただうめく事しか出来ない。

そんな俺を、悪意滴る目で見据えながら嗤う女はヘソの辺りに手をかけた。体に流れ込んで来る冷気が、一気に勢いを増した。意識が白く霞んでいく。

俺は 堪らず、意識を手放した。

「……君。 木下君！ おい、大丈夫か？ 木下君！」

体を揺さぶられ、大声で自分を呼ぶ声で気が付いた。薄く目を開けば、怖いぐらいに真剣な顔でこちらを見ている笹村さんが。

「う……あ……さ、笹村さん……」

頭を振つて起き上がるうとする俺を、彼が支えてくれる。

「そうだ！ 笹村さん、女は！？ ここに女がっ！！」

あの異様な光景を思い出し、俺はパニックになりかけながら周囲を狂つたように見回す。支えてくれる腕を払いのけ、暴れ出しそうになる俺を逆にガツチリと捕まえ、笹村さんはなだめてくれる。

「大丈夫だ。誰もいない。しつかりしろ、大丈夫だから」

「誰も？ 誰もいなかつたんですか？」

その言葉に必死になつてすがろうとする俺を、笹村さんはしつかりと見据えて言つてくれた。

「金曜の夜番だったし、気になつて来てみたんだ。店の方には誰もいないし、おかしいと思って事務所をのぞいてみたら、ここで君が倒れてた。他には誰もいなかつた。それは本當だ」

笹村さんの言葉に、ようやく体の震えが止まる。

「 助かつた……」

助かつた。助かつたんだ。

大きく安堵の息を吐く。

その後は朝まで、笹村さんが付き合つてくれた。店の周囲が白ん
 で来て、朝番のバイトと交代するまで、何事もなく過ぎた。

余程ひどい顔をしてたんだろうか？ 朝番に出て来た店員が、チ
 ラチラと俺の方を見ていたが結局何も言つて来なかつた。まあ俺も、
 話をしたい心境じやなかつたし。

身体の芯に残る重い疲れを引きずつたまま、ロッカーで着替えて
 制服を放り込む。

事務所を抜ける時、スチール机の上のモニターが嫌でも目に入り、
 俺は軽く身震いした。

「お疲れ様でした」

出来るだけ視線を合わさないようにして、コンビニの店内から外
 へ足を向けた。

「木下君」

外には自転車を押した笹村さんが待つていて、俺の姿を認めて声
 をかけてくれる。

「少し話して行こう。このまま帰つても、眠れないだろうし
 心配そうな顔で言つてありがたかったし、とても申し訳なかつ
 たが とてもそんな気にはなれない。頭の中がグチャグチャで、
 まともな話が出来るとも思えなかつたし。

「すいません。今日は帰ります」

笹村さんは俺の言葉を聞くと、そうか、と言つて少し心配そうに
 笑つてくれた。

「何かあつたら、いつでも相談にのるからさ。気にしないで連絡く

れよ」

人付き合いは苦手な俺だけど、笠村さんの気遣いは本当に嬉しかった。それじゃあ、と手を挙げて去つて行く彼の後ろ姿に、軽く頭を下げる。

疲れ切つた体を無理矢理動かして、自分のアパートへ辿り着く。後ろ手でドアに鍵をかけ、部屋の中へ文字通り転がり込んだ。室内の薄暗さにふと気付き、ブルツと身震いして急いでカーテンを開ける。晴天を約束するような陽光が窓から差し、俺はホツと息を吐いた。

昨夜から何も食べていないせいか、胃は空腹を訴えるが……食欲は湧かない。冷蔵庫からミニネラルウォーターを取り出し一口飲むと、少しだけ気が紛れた。

「しかし アレは一体……」

落ち着いたせいで、夜中の出来事を思い起こしてしまつ。

「ダメだ、ダメだ！」

頭を振つて嫌な記憶を振り払い、両手で頬を叩く。

「シャワーでも浴びるか」

俺は誰にともなく呟くと、狭い脱衣所へ足を向けた。

風呂場のシャワーコックをひねり、湯が熱くなるまでの間に服を脱ぐ。

「 何だ、コレ？」

シャツを脱いだヘソのあたりに、見覚えのない赤いアザを発見して手を止めた。こんな所にアザなんて、あつたか？ いや、夕べまでは、確かにこんなモンなんてなかつた。

そこまで考えて、俺はハタと思い当たつた。もしかして ファスナーを下すのもビカしく、ジーンズを脱いだ。

「うわああああああつ！！」

俺は自分の足を見て、その場にヘタリ込んだ。

足首からヘソの周辺、丁度、あの女が掴んだ部分に残っていたの

だ。赤黒い手形が。

ジリジリと近づいてくる、忌まわしい光景を思い出させるいくつもの手形。

無意識に床の上をまさぐつた手が、脱ぎ捨ててあつたシャツに触れる。その指先に、シャツの布地とは異なる感触があつた。

固まつてしまつた筋肉をどうにか動かし、自分の指先にあるモノを確かめる。

シャツの胸ポケットからのぞく、白いヒモ。そつとソレを引き出すと、朱いお守り袋が見えた。金曜のバイトに入る事が決まつた時、同僚の店員にもらつたモノだ。

急にあの女が姿を消したのを不思議に思つてたけど、このお守りのお陰だつたんだろうか？ これがなければ、こんな手形だけじゃ済まなかつたのかも知れない。

そう思つた瞬間、胸ポケットからお守り袋が完全に抜けた。

「 つ！」

コトンッ

小さな音を立てて床に落ちたソレを目にして、俺は完全に言葉を失つた。

鮮やかな朱色をした袋は、真ん中から引き裂かれたように破れ、内に納められていたであろう木製の札が……真つ二つに割れて転がつている。

目の前に突き付けられた現実に為す術もなく、ただ呆然と座り続けるしかない俺の後ろで、無人の風呂場に降りしきるシャワーの音だけが響いていた。

『アタシト、オンナジクセー』

あの女の言葉の意味を知つたのは、手形のアザが薄くなつた頃だつた。

両親の期待を一身に背負つた女子高生が、希望していた大学の受験を失敗したのだという。

それを両親から激しく詰られた彼女は、衝動的に店の入っているマンションの屋上から飛び降りたらしい。

彼女には、分かったんだろうか？

だからこそ、「同じ」という言葉だったのか？

もしも、俺が。

もしも……もしも俺の神経がもう少し細かつたら。

そうしたら、彼女と同じ道を辿っていたかもしれない。

『ドウシテ、アナタハ生キテルノ?』

そう言いたい気持ちも分からぬでもない。
だからと書いて、俺は俺でしかない訳なんだが。

あの日以来、店長に何と言われようと「金曜の夜バイト」を断固として断り続けていた。

了

第三夜 非正規雇用社員

第三夜・非正規雇用社員

うちのコンビニには、店員の誰もが知っている「非正規雇用社員」がいる。

と言つても、不正に雇用している訳じゃないから安心して欲しい。もちろん「非正規」であるから、給料なんかは払っていない。まあ、うちとしては大いに助かっているんだし、給料を払うぐらい何て事はないんだが。でも金をもらつても、使い道はないかもなあ。

多くのスーパー や デパートが抱えている悩みを、同じくコンビニも共有している。

『万引き』

スリルを感じるゲームだと思っているヤツや、数百円を惜しむやツ、本気で生活に困っているならまだしも、金をちゃんと持つているのに支払わないんだから嫌になる。

『万引き』なんて言うから、軽い気持ちでやるんだ。覚えとけよ、『万引き』はれつきとした『窃盗』で犯罪なんだからな。それで潰れる店だつてある。ホント、堪つたモンじゃねーよ。

しかも最近では、店の備品まで盗んで行くヤツがいる。トイレツトペーパーとか、ゴツソリだぞ。信じられるか？

けど、どんな時に大いに力を発揮してくれるのが、うちの店の「非正規雇用社員」なんだ。

警備員？ いや、そんなんじゃないよ。ん？ 違う、違う。

うちにいる「非正規雇用社員」はな、生きてる人間じゃないんだ。『幽霊』だよ。は？ ふざけてるのかつて？ うーん、そう思うのも無理はないよな。自分だつて、最初はそつだつたし。

まあ、そんな力一杯不信そうな顔しないでさ、ちょっと俺の話に

付き合つてよ。

俺がこのコンビニに店長としてやつて来たのは、一年ちょっと前ぐらし。

引き継ぎの時に、前任の店長が俺にそつと耳打ちしてきたんだ。驚くといけないから、先に言つておくよ。この店はね、『出るから』

「は？ 何がですか？」

「だから……コレ、がね」

前任者はそう言つて、両手を胸の前で、ダラリと垂らして見せた。

「ちょっと、やめて下さいよ。俺、そういうの苦手なんですから」

眉間にシワを刻んだ俺に、彼はいたずらっぽく笑う。

「大丈夫だよ。店の人間に悪さしたりはしないから。お金くすねたりするような、不心得者でない限りね」

いや、からかわれているのかと思つたよ、一瞬。第一、『出る』コンビニって何なんだよつて感じじゃないか？

でも、店に出るようになつて、その言葉の意味が良く分かつた。確かにこの店には、いるんだよ。誰も採用した覚えのない店員が。

いや、もしかしたら、店で働く誰よりも長く『』にいるのかも知れないな。

怖くないのかつて？ 全然。

だつて、店には寒害がないからさ。それどころか、皆が感謝してるんだ。

うちの店はや、高校や大学の近くにあつて、学生の利用客が多い。だからつて訳でもないんだが、軽い気持ちで万引きをする奴が多い。化粧品、雑誌、菓子、ジュース等々。盗まれれば、その分の売り上げは入らない。だからマイナス分は店の持ち出しどなる。穴埋めするには、倍の数量を価格を上乗せした状態で売らなきゃならない。

の御時世、純利益さえままならないってのに、商品値上げして、
客足が遠退いて、そんでもって万引きも減らな^いってんじゃ、どう
にもやり切れないだろ？

以前はうちの店も、かなりの万引き被害に悩まされていたらしく、特に酷かったのが、化粧品。モノが小さいから、見つけづらいんだこれが。しかも、店のトイレ使ってメイクして行く奴までいる始末。ホントになあ、自分のやつてる事が世間一般で言う「犯罪」だつて、理解してくれよ。

んで、俺がソレに遭遇したのは、店長になつてから一週間程してからだつた。

昼過ぎから四時頃までは、昼食を求めるドライバーや菓子を買い与えるために子供を連れて来る近所の主婦、学校が終わつた学生達がやつて来て賑やかだ。

レジの混み具合を気にしつつ、商品の発注作業を行っていた俺の耳に届いたのは、この場にそぐわない男の悲鳴。

駆けつけてみると、トイレの鏡の前で腰を抜かし、アワアワとうとう立ち下がる。三つ鼎鼎。

俺は事態が飲み込めず、とりあえず、目の前の高校生をなだめる
ことにした。

「大丈夫ですか？」落ち着いて下さい。一体、どう
したんですか？」と尋ねようとした時、彼のズボンのポケットか
ら何かが落ちた。腰を屈めて手に取つてみれば、それは携帯音楽プ
レイヤーに使用するヘッドホン。購入した事を示すテープも貼られ
ております、むき出しのままだ。

おいおい、もしかして万引きかよ？

俺が口を開こうとした瞬間、タイミングを計ったように店員の一

「床が濡れていたので、滑ってしまわれたようですね。お怪我があ

るところませんので、事務所の方へびづれ、「

慣れている。これまで何度も、こんな場面を見ているのだろうか?

店員は高校生を立たせると、床の上に落ちていた商品をさりげなく拾い上げた。

「店長、こちらをお願いします。後で、事務所の方へ小さい声で俺に告げ、店員が高校生を事務所へと案内して行った。「申し訳ございません。トイレの床が濡れていたようです。お騒がせ致しました」

こちらを見ている数人の客に向かって頭を下げる、掃除ロツ力一からモップを取り出す。……だが、トイレの床に滑る程の水は見当たらない。手を洗った時に跳ねたと思われる水滴が、若干痕を残しているだけだ。

ん? どう言う事だ?

こんな所で首を傾げていても、しじみがない。俺は手にしていたモップで洗面台の下を拭き、トイレのドアを開けた。

雑誌コーナーの前に立っていた中年の男性客と、田が合つた。トイレを待つてたのか?

「お待たせしました」

そう言つて軽く頭を下げると、彼は、いやいやと手を振つた。「そつか、店長さんは来たばかりなんだ。驚いたでしょ?」

「はあ、そりや、まあ」

「いや、ホント、マジで、何が何だか。」

「こここの店はね、あるんだよ、ああ言つの。店長さんも早く慣れた方がいいよ。常連のお客さんとかは事情を知つてゐるから、今さら驚かないしね」

「ええっと お客さん? 一体、何の話を?」

全く理解出来ない。話について行けない。

「前の店長さんから、何も聞いてないのかい?」

「そう言えば、何か聞いたような気がするが……。」

「まあ、事務所へ行つて話を聞けば分かるが。あの高校生と店員さんが待つてるんだろ？」「…」

「そう言えば、そうだった。」

事務所に顔を出してみると、高校生は店員と向かい合わせで座っている。落ち着いているように見えるが、青い顔をして、時折肩を震わせていた。

「店長」

俺を認めた店員が声をかけてくる。

「あーっと、君、名前は？」

スチール椅子を引き寄せ腰を下す俺に、高校生はうつむいたまま、上目使いに視線をくれた。その目の中には確かに、何者かに対する怯えが浮かんでいる。

幾度か口を開くのだが、うまく声が出ないよつた素振りで結局口をつぐんでしまう。唾を飲み込むためだらうか、数回喉が上下し、彼はようやく声を発した。この年頃の少年のものとは思えない程、か細く、弱弱しい声を。

制服を見れば、どこの学校かは分かる。うちの店から一番近い高校のものだ。

言葉を発した事で、少しは気が楽になつたのだろうか？舌で唇を湿らせるとい、俺に向かって口を開いた。

「あの…本当に、済みません。出来心だったんです。お金は払いますから」

ちょっとでも言葉が途切れれば、自分の中でふるこ起こした勇気が萎えてしまうとも思ったのか、一気にしゃべる。

万引きの罪から逃げよつてのか？それにしちゃあ、必死さが尋常じやない。目が血走って、口から唾を飛ばしそうな勢いだ。

一体、トイレの中で何があつたつてんだよ？全く、分からぬ。「済みません、済みません、初めてだったんです。これまで、こんな事したことなかったんです。本当に、信じて下さい」

聞けば、自分が使つてゐる物よりも機能の良さそうなヘッドホン

が目に入り、つい魔が差してしまったんだそうだ。

「出来心」や「魔が差し」で商品盗まれちゃ、こつちは堪らんのだがな。

すると、それまで俺の隣でじつと話を聞いていた店員が口を開いた。

「君が見たのは、何だつた?」

はあ? 「見た」? 何の事だよ? 誰か俺に説明してくれ。

だが高校生は、店員のこの言葉に過剰な程の反応を見せた。

戻りかけていた顔色がスッと青ざめ、体がブルブルと震え始めた。その振るえを抑えようとしているのか、両手をギュッと握り締めている。

「どもが……」

喉から押し出すみたいにして、言葉を発する。うまく言葉にならないのが、数回、唾を飲み込んだり咳払いしたりを繰り返す。

「子供が……子供がいました。両目のない子供が、僕の背中におぶさつて……後ろから首に小さな手を伸ばして……。真っ黒な穴になつた目から、真っ黒な血を流しながら僕を見ていたんです。鏡の中から、僕の事をじつと」

その時の事を思い出したのだろう。まるで高熱を出した時みたいに、全身がガタガタと震えている。見てくる口チラが氣の毒になつてぐる程だ。

「店長、どうやら本当に初めてのようですよ、この彼

……だから、ちゃんと分かるように説明してくれよ。

そう思つてているのは俺だけじゃないみたいだ。高校生も青い顔で店員を見やつしている。俺と高校生の様子に、店員は一つ息をつくと話し始めた。

「君が見た子供はね。この店にずっと前から棲んでいるモノ達の人だよ。彼等はこの場所が好きで、長い口トココにいるんだ。どうしてここにいるのか、何のためなのか、それは知らないけど、この近隣じや有名な話なんだ」

何の話だ？ 棲んでる？ 彼等？ 何だ、そりや？

きっと俺の顔には、面積一杯に「？」マークが浮かんでいた事だらう。

「彼等はこの場所を、自分達のテリトリーだと思つてゐる。だから、この場所、この店から無断で何かを持ち出そうとする者に我慢がならないらしい。万引きをして商品をトイレに持ち込む連中がいるでしょう？ 盗んだ物をカバンに入れようとして」

店員の最後の一言に、高校生の肩がピクリと動いた。思い当たる節があるのだろう。

「そうするとね、出て来るんですよ。どう言つて訳だか、見る者にとって相手が違うみたいで。彼のように初めての場合は、子供が見えるんです」

なる程、それで高校生の盗みが初犯だつて分かつたつてか。
……つて、これで納得してもいいもんなんだろうか？

俺が妙な顔をしているのを見て、店員は「仕方がないなあ」と言うように苦笑した。

「これまでの経験で、ハズれた事は一度もないんですよ。大丈夫ですから、任せて下さい」

自信満々な店員の言葉に押し切られた形で、俺は様子を見る事にした。どう考えたつて、相手の方が場数を踏んでるっぽいしな。

そんな俺をよそに、店員は高校生に向かつて話し始めた。

「君も反省しているようだし、初犯と言う事で、今回はちゃんと正規の代金を払つてもらうつてことで大目に見るよ。でも、君がやつたのは『万引き』なんて軽いモンじゃなくて、『窃盗』と言つれつたとした犯罪なんだつて事を、しっかりと理解してもらわないと」自分に対して語られる一言一言を、彼は神妙な顔付きで聞いていた。

「いいで、いつか体験をしたつて事は、君のためにも良かつたと思うよ。遊び半分でこんな事を繰り返していたら、いずれ間違いなく警察のお世話になるだらう。学校にだつて連絡が行く。そうなつ

たら、君の未来には大きな傷が付くかも知れないぞ。今この場で、何をやるかとしていたのか、自分でちゃんと考えて反省するんだ。もう一度と誘惑に負けないように。さもないと

今さらながらに、自分のしでかした行為のもたらす結果に思い至つたのだろう。その目に真剣な色が浮かぶ。

そんな高校生の様子に、俺は内心、ちょっと安心していた。この様子なら大丈夫だろうな。自分のやらかした事を理解して反省している。ここで反省出来るなら、再犯の確立はぐんと低くなる。

店員の「そもそも」と続く言葉を、「通報しなければならない」もしくは「学校に連絡する」だと、俺は勝手に解釈していた。だが出て来たのは、俺の想像の範囲を大きく上回つていた。

「これから先、君の心に良からぬ考えが生れるたびに見えるようになるよ。鏡だけじゃなくて、それこそ窓ガラスや消えているテレビの画面、プールやお風呂の水面にもね。場所も時間も関係なしに、『映る』もの、『写る』もの全部に現われる。君が見た子供だけじゃなく、他のメンバーもやつて来るだろう。俗に言つ『取り憑かれ』る『つてやつだ』

想像してみた。……堪らん。

考えてみて欲しい。家の窓、テレビ、パソコンの画面、風呂の湯、飲もうと口をつけたコーヒーの表面。それらに映り、じつと自分を見つめている何モノか。

ポツカリと空いた闇のような両手のない穴が、常に自分を見張つている。消そうとして消えるモノではなく、目にせず、映らず、写らずに生活して行けるとも思えない。

きっと俺と同じように考え、想像したのだろうな。高校生も酸っぱいものを飲み込んだような表情になつた。

「本当に、済みませんでした。もう絶対に、こんな事はしません。本当に、本当に、済みませんでした」

ちょっと涙目になりながら、高校生は何度も頭を下げ、盗みつもりだつた商品の料金を支払つて帰つて行つた。

それを見送っていた店員が

「あんな風に、聞き分けのいい子ばっかりだと、いつも助かるんですけどねえ」

と呟いているのが耳に入る。

「まあねえ。けど、あんだけ齎かしとけば、また万引きしようつって
気も起きないんじやないか？」

高校生の名前や住所などを記入した用紙をファイルに挟みながら、
店員に言葉を返す。

「あれ？ 店長は僕が言つた事、ただの齎しだと思つてるんですか
？」

「だつて、そつだりつ。あんなの本氣じやないだりつ？ 齎かじじ
やなきや、冗談か？」

ファイルを事務机に戻して顔をあげると、店員がニヤツと笑うの
が目にに入った。

「店長つて、この手の話、苦手な人だつたんですね。残念ながら齎
しでも、冗談でもないですよ。全部、本当の事なんですね、これが「
おいおいおい……マジかよ？」

「じゃ、何か？あの『取り憑かれる』つてのも？」

「はい、本当です。実際にありますよ、謝りに来た例が
興味をそられた俺は、詳しく話を聞いた。

以前、この近くで独り暮らしをしていた六十代の男性が、うちの
店で頻繁に万引きを繰り返していた。

生活費を削るためなのか、生来そういう性癖だったのかは不明
だが、小さな品を数持つて行くので店としてマークを強化してい
たようだ。

だが敵もさるもの、店が混み合つて店員の手が空いていない時を
狙つて、やつて来る。

数回捕えて厳しく諭したのだが、のらりくらりとして焼け石に水。
拳句の果てに、年寄りをいじめるの、独り暮らしから金むしり取つ

て楽しいのか等と、逆ギレして大騒ぎしたらしく。

ほとほと困り果てた店側は、仕方なく警察を呼び、男を連れて行つてもうつ事にした。

次に男が店に来た時にどうするのが、当時の店長も頭を抱えていたそうだが、それ以来、パタリと男は店に顔を出さなくなつた。

警察できつくお灸を据えられて、男もようやく反省したのかと思つていた矢先。血相を変えた男が店に飛び込んで来た。

店員の制止を振り切つてトイレに駆け込むと、鏡の前で土下座をし、床に頭をこすりつけんばかりにして、必死に謝罪の言葉を繰り返している。

「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」許して下さるもんいません許して許して許して許してごめんなさい「ごめんなさい」。

延々と続く謝罪の言葉は、怪しい呪文のように狭いトイレの空間に響いていたと言つ。

他のお客の目もあるし、何より営業中にそんな事をされれば仕事に差しつかえる。

血走つた眼を据わらせて、床に額をこすりつけている男をなだめすかし、事務所へ連れて行くことにした。

引きずられるようにして事務所へ向かい間も、男はずつと誤り続けている。

どうにか椅子に座らせ、水を与えて落ち着かせる。震える手で湯呑みを支え、一口一口水を含んで、ようやく大きく息をついた。

事情を尋ねる店員に、男はボソリボソリと語り始める。

万引きをするようになつてから、家の鏡やガラスに変なモノが映り込むようになったと言つ。その時は特に気にも留めていなかつたらしい。

はつきりとしたモノではなく、何やらボンヤリとしたモノが、鏡などを見るたびに自分にまとわりついている。だが、自身の年齢もあり、どうどう田にきたかと思つ程度だったと言つ。

万引きに対する罪悪感はあっても、意識に引っかかるのはわずか

な間。またすぐに店の商品に手を伸ばし、カバンやポケットの中へ。そうこいつしているうちに、「映り込むモノ」の輪郭がハッキリしてきた。

鏡の中からジッと無表情に自分を見つめている、闇のよつに空っぽの両目。そこから流れる真っ黒な涙とも血ともつかない体液。幼い子供の時もある。髪を振り乱した若い女の時もある。頭からダクダクと血を流した中年男性、傷だらけの白髪の老婆だった事もあつたと言う。中でも一番恐ろしかったのが、自分と同じくらいの年齢の男性だつたそうだ。

全ての歯が抜け落ちた口を動かし、男の罪を責め続けた。

一日や一日ではない。毎日、毎日、鏡の中から、窓ガラスから、停まっている車のフロントガラスから自分を見ている。テレビから、風呂から、お茶から、道ばたの水溜りから男の罪を責め立てる。しまいには、すれ違うだけの人間の眼にも映るよつになつたと言つ。

実際、それらを見なくて済むよつに、自身の手を傷付けようと考えた事もあつたらしい。家中の窓ガラスをふたぎ、鏡を覆い、見ないよつにしても、視界に入つてくる。「映らない」「写らない」ように生活する事は、もしかしたら不可能かも知れない。

そう思い至つた時、男は本気で恐怖したのだと。これまで自分がやつて来た事が「犯罪」と呼ばれるのだと。今こじこじにかしなければ、この先どこまでも追つて来るのである。

フランシュのように考えが脳裏を駆け巡つた途端、いてもたつてもいられなくなり、店のトイレの鏡に向かつて謝つたのだ。

自分が盗みを働き、トイレの個室で商品を隠した時に、その行為を鏡の中からジッと見ていたモノ達に。

男は、これまで万引きした商品がどれくらいの金額になるのか正確には分からぬが、と前置きしながら、封筒に入った三万円を置いていったそうだ。

店としてはそのまま受け取る訳にもいかず、何度か男に連絡して

金を返そうとしたらしい。だが男はガンとして受け取る事を拒み、しばらくして引っ越してしまった。遠方に住んでいた息子夫婦と同居が決まつたらしいと言つ事だった。

この一件以来、うちの店での万引き被害は目に見えて減つたのかとか。

「まあ、万引き被害がゼロになつた訳じや、ないんですがね」

店員は語り終わると、軽く肩をすくめた。

「あつと、話しみ過ぎちゃいましたね。レジ、並んでるんで行つて来ます」

バックヤードの仕切り扉を開き、小走りにレジへ向かう後ろ姿を見やりながら、俺は何だかボーッとしてしまつていた。

俺がトイレの連中と会つた事があるのかつて？　ああ、何度かあるよ。

ただ、彼等には彼等のルールがあるらしくつてな。万引き犯達が言つよつと、おどろおどろしい姿を見た事は一度もないんだ。と言つても、トイレの掃除をしたり、洗面台に花を置いたりする時に、視界の端にチラリと映るだけだけね。

けど、よろしくない考え方を持つ人間に対しては、客も店員も関係ないらしい。いや、店を守る立場にある店員に対しての方が厳しいかもしけないな。

俺は机の上に積まれたトイレットペーパーの山を人差し指で弾きながら、目の前に座る人物に向かつて言つた。

こんだけの量、持ち帰ろうとしたんだ。出来心つて訳じやないよな？　自分が何をしようとしてるか、ちゃんと理解してたはずだろう？　それに、今回が初めてつて訳でもなさそつだじ。

あん？　今回が初めてだつて？　おいおい、馬鹿言つちやいけな

いよ。ボールペンやセロテープを一個二個持つて行くのとは違うんだぜ？ 店の備品のトイレットペーパーを五個も六個も、『力い力バソに詰め込んで、何食わぬ顔をしていられるなんて、場数踏んでなきゃ出来ないって。

それにさ。

俺は一ヶ月程前に雇つたばかりのアルバイトに教えてやつた。

「君のロッカー扉の鏡からさ、物凄い形相で睨んでんだよ。うちの『非正規雇用社員』達が。しかも、一人一人交代しながらね」

了

第四夜 明け方、四分間のタブー

第四夜・明け方、四分間のタブー

僕が以前働いていたコンビニでの話。

そこのコンビニには、いくつか不思議な決まり事があつた。

「夕方五時以降は店の前に水をまいてはいけない」だが、「トイレの鏡の前に花を飾つてはいけない」「雨の日の傘立ては店の中、ドアのすぐ脇に置く」「フロアマットは常に乾いた物を使う事」だとかの、水や雨に関係している事が多かつたように思う。

他の店舗ではこんな話聞いた事がないから、僕が勤めていたコンビニが特別なんだうな。

中でも特に不思議だったのが、コレ。

『午前四時四十四分からの四分間は、店のドアを絶対に開けてはいけない』

明け方の四時四十四分から四十八分までなんていう半端な時間、絶対に店のドアを開けちゃいけないと決められていたんだ。

これって、おかしいだろ？

川沿いにある、住宅街の中のコンビニとは言え、早朝の利用客がない訳じゃない。少し離れてはいるけど、バイパスだって通つてる。配送の車だって来るだろうに。

でも僕が受け持つっていたのは休日の昼間だったから、明け方のタブーなんて関係なかつた。

「へー。そんな変な決まり事があるんだ」

その程度の認識で済んでいた話だつたんだけど。

「安西さん、来週の日曜日の夜つて、何か予定入つてるかなあ？」

バイト仲間の中條君から電話があつたのは、火曜日の夕方だつた。大学の講義が終わり、図書館で調べ物をしていると携帯が震えて着信を知らせる。

慌てて図書館を出ると、携帯を耳に当てた。

「あ、もしもし、安西さん？」

「もしもし、中條さん？ どうしたんですか？ 珍しいですね、中條さんから電話なんて」

彼とはそう親しい訳ではなかつたけど、何回か顔を合わせた事があつた。 でも、携帯の番号、教えたつけ？

「急に電話して、悪い。来週の日曜日、俺、夜番なんだけどぞ。どうしても外せない用が出来ちゃつて。店長に掛け合つたら、代わりに出てくれる人がいるなら、休んでもいいって言われてさ。他のメンバーにも連絡したんだけど、皆ダメなんだよ。で、安西さんと同じシフトの森本さんに頼んで番号教えてもらつたんだ」

勝手に携帯番号調べて悪かつた、と電話の向こうで中條さんが謝る。

「ああ、いいですよ。気にしないで下さい」

そう言いながら、僕は思い出していた。

そつか、森本さんか。確かに前に、映画のチケットの事で番号教えたんだつけ。

「それでさ、来週の日曜日の夜なんだけど、どうかな？ 俺、昼間は時間空いてるんだよ。でも、八時以降は、どうしても都合つかなく。だから、シフト交代してもらえると助かるんだけど」

「ちょっと待つて下さい。次の月曜日の講義、確認してみますから」携帯をアゴと肩で挟み、カバンの中からスケジュール帳を引っ張り出す。パラパラとページをめくり、次の週の授業の予定を調べてみた。

午前中から抗議が入つてゐるようなら、いくら僕でもシフトを交代するのは無理だ。

「ええと、日ですよね。 ああ、午前中は休講になつてま

すから、大丈夫ですね。代われますよ」

「お、マジで？ 助かるよ。安西さんがダメだったら、どうしようかと思つてたんだ」

僕の返事を聞いて、電話の向こうの中條さんの声が安堵で弾むのが分かつた。

「じゃあ、僕が日曜日の夜十時から翌六時まで、中條さんが朝十時から夕方六時までつて事で」

「店長の方には俺からも連絡するけど、安西さんからもいつとてもらえるかな？」

「だったら、帰りに店に寄つて伝えときまよ」

本当に助かつたよ、恩に着る。そう言つて中條さんからの電話は切れた。

あの様子じや、相当焦つてたんだろうな。さて、それはそうとしこれからどうしよう、今さら図書館で調べ物をするつて気分でもないし。

携帯の画面に田をやれば、もうすぐ六時にならうかという時刻だ。駅の近くのファミレスでコーヒーでも飲むか。その前に本屋に寄つて、今日発売になつてゐるはずの「ミック」の新刊でも物色してみよう。カバンのヒモを肩にかけると、僕は大学の敷地を歩き出した。

僕の住んでゐる町は、中心を流れる川に分断されてゐる。さして大きくはない川だが、隣町との境に差し掛かる頃には一級河川へと注ぎ込む。今でこそ護岸工事によつてキレイに整えられてはいるけれど、二十年位前までは大人の背丈程の草が生い茂る土手が続いていたそうだ。

川が流れているからといつて訳じやないだろが、町全体が湿つている感じがする。そんな土地だ。みずは水捌けが、あまり良くない。雨が降つたりすると、道のあちこちに水溜りが出来て、なかなかなくならない。

梅雨や秋の長雨の季節になると、まるで湿地で暮らしていくよう

な気になる。吸い込んだ大気に含まれた水分が、肺というフィルターを通して全身に運ばれる。

ちょうど川の流れが濁んで水が濁るみたいに、この町の風も濁んで濁っている。僕が住んでいるのは、そんな町だ。

コンビニのある場所は、暗渠になつた川が地面にもぐり込むちょうど入口の部分にある。地下で緩やかにカーブを描き、少し離れた線路沿いに顔を出す。

元々この辺りは一時的に水深が深くなつていて、左手に向かってカーブしている場所だつた。そのせいなのか、上流から勢いをつけて流れてきた水がこのカーブでスピードを失い、濁る。

昔は長雨のたびに増水して大変だつたと、土地に住む年寄りは良く言つていた。

いつもより早い時期に発生した季節外れの台風のせいで、一二、三日前から天氣がグズつき始め、町は常より更に濃い湿度の底に沈んでいるように思えた。

中條さんと約束をしていた日曜日も、朝からどんよりとした厚い雲が垂れこめ、ジットリと不快な空気が漂つていて。

たまに時間が出来て、溜まっている汚れ物を片付けようとするところだ。仕方がない。こんなに湿度の高い日に部屋干しなんて、御免こうむりたい。

僕は汚れた衣類をバッグに詰め込むと、自転車で実家に向かう。コインランドリーに行くよりも近いし、何より金がかからない。浴室乾燥を使わせてもらつて、ついでにゆつくりしてこようか。

実家までは自転車で三十分程度、日頃運動不足を自覚している僕にはいい運動かも知れない。

大学進学を機に一人暮らしを始めた訳なんだけど、別に通学に便が悪かつた訳じゃない。ちょうど同じ頃に四つ年上の兄貴が結婚し、実家で母親と一緒に暮らす事になつたからだ。

父親は高校一年の時に他界し、それからは母が一人で僕達兄弟の

世話をしてくれていた。幸い父親が残してくれた生命保険があつたし、高卒で既に社会に出ていた兄の勧めもあって、僕は大学進学を決めた。

学生時代から付き合っていた彼女との結婚が決まった時、母は一人に新居を構える事を提案したんだけど、兄貴と彼女のたつての願いで同居する話でまとまった。

んで、僕はと書つと。

さすがに新婚夫婦と一つ屋根の下で生活するつてのは……ねえ？
僕だつて一応は年頃の男性なんだからさ。

以上の理由から実家を出て、一人暮らしをしている。それでも一、二ヶ月に一度は顔を出して、夕飯をごちそうになつたりする。

「うあ、ヤバ。降つて来た」

ペダルを踏み込む僕の顔に、雨粒が当たる。とつとつ降り出したんだ。本降りになる前に、実家に着かなくちゃな。自転車をじぐ足に力を入れる。

急いだ甲斐もあつて、雨脚が強くなる前に実家のガレージに滑り込む事が出来た。

『はーい？』

チャイムを押すと義姉の声が応える。

「あ、浩幸です」

『あら、浩幸君。ちょっと待つてね』

数秒後にドアのカギが開き、義姉が顔を出した。

「雨、大丈夫だった？ さ、早く入つて」

いつも思うんだけど、実家に帰る時に一番しつくりくる挨拶つて何なんだろう？

自分の家なんだから「ただいま」でいいのか。それとも兄貴夫婦の家もあるんだから「お邪魔します」なのか。帰るたんびに迷うで、結局「お邪魔します」とか言つちやう訳なんだ。

「浩幸君の家なんだから、そんなにかしこまらなくてもいいの」「たの」「そう言って義姉は笑うけど。やっぱり、自分が住んでいた頃とは空気が違う。少しは緊張もあるし、遠慮もある。

「日曜日なのに、珍しいわね」

「今日は、バイトの時間が違うんですよ。知り合いでに頼まれちゃって」

事情を説明して洗濯させてもらえるか尋ねると、快くOKしてくれた。

洗濯機に汚れ物を放り込み、洗剤を計つているとリビングから声をかけられた。

「コーヒー、飲むでしょ？」

「あ、はい、お願ひします」

「スタートボタンを押せば完了。後は機械のお仕事だ。

「そう言えば、兄貴と母さんは？」

さつきから姿が見えない。

「康浩さんは、修理に出てた携帯を引き取りに行つたわ。代替機は感覚が違うから使いにくいつづツツツツ言つてたから、よつやく静かになりそよ。お義母さんは買い物。お皿までに行けば、野菜が安いからって」

ああ、あそこのはスーパーか。日曜日は皿までに行けば、野菜の安売りをしてたつ。

「もうそろそろ戻つて来る頃だと思つけど。なあに、私と二人じやあまづい？」

「いや、別にそつて訳じや。日曜の昼間だから、皆いるかな？ と思つてたし」

しじろもじろになりながら弁解するけど、本当のところは少し気まずい。

兄貴と付き合つていた頃から知つてはいるが、「兄貴の恋人」と

「兄貴の嫁さん」ではやっぱり違う。

出されたコーヒーを飲みながら、他愛のない会話に適当に相槌を

打ち、兄貴か母親のどちらかが早く帰つてくれる事を祈つた。

義姉は余程、暇を持て余していたんだね。最近のドラマから映

画の話まで途切れる事がない。

「うーうして、洗濯終了を知らせるメロディが聞こえ
てきた。

「ちょっと行つてきます」

少しホツとして脱衣所へ行き、洗濯物を入れたカゴを抱えた時、
玄関でドアの開く音がした。

「ただいま。あら、誰か来てるの？」

「お義母さん、お帰りなさい。少し前に浩幸君が

「へえ、珍しいわね、日曜日に」

そんな会話を耳にして、僕は思わず苦笑する。この家では、日曜
の昼間に僕がいるのは珍しい事らしい。

洗濯物を片付け、カゴを所定の位置へ戻してリビングへ。

「お邪魔してるよ、母さん」

テーブルの上に買い物袋を置いて戦利品を広げていた母に声をか
けた。

「どうしたのよ、急に」「

「今日のシフト、夜番の知り合いと代わったんだよ。久し振りに時
間も出来たし、溜まつてた汚れ物を洗濯しようと思つたんだけどさ
あ。そう言う時に限つてこの天氣だろ？ 僕の部屋じゃ干すスペー
スもないし、浴室乾燥使わせてもらおうと思つて」

「あらあ。じゃあ、使用料取らなきゃね」

「お義母さん、そんな事言つと、浩幸君本気にしちゃいますよ」

「冗談よ、あははは。と軽快に笑う母親を見ながら、僕は内心「
半分は本気だったな」と考えた。

夜までゆっくり出来る事を知ると、じゃあ夕食は一緒に食べられ
るのね、沢山作らなきゃ、と母は嬉しそうだ。義姉さんと一人で台
所に並び、ああでもない、こうでもないと話をしている。

我が家では、世に「嫁・姑問題」は縁遠いモノなかも知れない。

まだまだ自分の健康に自信のある母は、以前から勤めているパートを続け、時間のある日は趣味のサークルにと忙しい。いい加減、パートを辞めて家でゆっくりしたりじりだと言つたら、笑顔で即却下された。

『一つの台所に一人の主婦は争いの元なのよ。今は私も元気なんだし、涼子さんも好きな事をすればいいの。先の事は分からなけれど、今はこのままでうまく行つてるんだから』

それが母の言い分で、僕には考えも及ばない様々な事を思つてゐたと知つた。

やがて兄貴も帰宅し、久々に家族勢揃いだ。

出された菓子をつまみながら、兄貴と大学の話やらバイトの話やらで盛り上がる。

「そう言えば、あなたのバイトしてるコンビニって、あの川の傍なんだけ?」

濡れた手をタオルで拭いながら、母親が話に入つて来る。

「うん? ああ、そうだよ。ちょうど川が潜る辺りにあるお店」

新しく淹れたコーヒーに砂糖を投入しながら、僕は答えた。

「あの辺りって確かに、変な噂があつたんじゃなかつたかしら?」

あごの先に指を当てて首を傾げながら、ねえ涼子さん、聞いた事ない? などと義姉に声をかけていた。

「何だよ、変な噂つて?」

せんべいの塊を噛み碎き、コーヒーと一緒に飲み下す。

台所での用事が済んだのか、義姉が一人分のコーヒーを持って加わつた。

「噂つて、あれですか? 雨の日の夜には、川縁かわべに出るつて話」

母の前にカツプを置くと、自分のカツプを持つて兄貴の隣に座る。

「ああ、何かそれ聞いた事があるな。高校ノ時に有名になつたよ。浩幸のバイト先つて、そこらへんなのか」

「何の話だよ？ 全然分かんないし」

僕一人だけ取り残されてる気分だ。

機嫌が悪くなりかけているのを察したのか、母がまあまあとためにかかる。

「もう三、四十年ぐらい前になるかしらね。あの辺りって、工事して暗渠になる前はカーブになつてたでしょ？ あそこで急に深くなつてたし」

「だから工事の時、水深の差を利用して暗渠にしたんだろ？」

「そうなのよ。あの川はね、長雨、大雨の時期には良く氾濫したの。周辺ではかなりの被害が出てね。一気に増えた川の水が、カーブの部分に流れ込んでくるから、耐え切れなくなつて決壊しちやうのね」
護岸工事以前のこの町が、たびたび水害に悩まされてきた事は、小学生の時の授業で教わった記憶がある。亡くなつた人の数も半端じゃなかつたつて。

「だからあの辺りは遊水地として利用されてたんだよ。民家を建てないようにしてね。川の事故や増水で亡くなつた方のために『川施餓鬼』もやつてたのよ。でも整備が始まつてからは、そんな事もしくくなつちやつたし」

バイト先のコンビニも含めてあの辺りは、暗渠が完成した後で開発された土地なのか。元々が遊水地利用されていた場所だから、常に湿つているように感じるのかも知れない。

「その頃からかしらね、妙な噂が聞かれるようになつたのは」

一旦言葉を切つて、コーヒーを口に含む。

いや、だから。その『妙な噂』つてのを知りたいんだけど。

「ええつと、確か『雨の夜は川から死者が這い上がつて来る』だつけ？」

「そうそう、聞いた事ある。雨に呼ばれて死んだ人達がやつて来るから、出歩かない方がいいって」

オカルトやホラーに関しては全く興味のなかつた僕にとって、始めて耳にする話だ。と言うより、自分の家族がこの手の話を耳を輝

かせて語る人種だつた事に驚きだ。

「おばあちゃんが川向こうに住んでいたけど、子供の頃、良く怒られたわ。雨の日に使った傘を玄関先に置いておいたら、『家の前に雨を呼ぶ物を置くと、ガモウジヤがやって来るからやめなさい』って。でも今でも分からないの。『ガモウジヤ』って何？」

義姉が兄貴に尋ねるが、あいにく兄貴も知らないらしい。僕も知らない。で、三人揃つて母親を見る。

「コーヒーを両手で包み、ゆつくりと中身を口に運んでいた母が肩をすくめる。

「あんた達ねえ。オカルトネタもいけど、自分達の住んでる土地の事なんだから、もう。『ガモウジヤ』つてのは『川亡者』の意味よ。川の事故や水害で亡くなつた人の事で、『カワモウジヤ』が縮まって『ガモウジヤ』になつたの」

「じゃあ『雨を呼ぶ物を置くな』って言つのは、どういう意味なんですか？」

義姉の質問に、母は窓の外で降り続ける雨をチラリと見た。

「ここに昔から住んでいる人なんかは言つわねえ。濡れた傘や雨水の溜まつたバケツなんかを置いておくと、その水が『ガモウジヤ』を呼ぶと思われたの。ほら、靈とかつて水氣のある湿つた場所に出るつて言つじやない。だから、出来るだけ水氣のある物を家の周りに置かないようにしてるのよ」

母親の話を聞いていて、僕はコンビニの事を思い出した。

『雨の日の傘立ては、店の外ではなく店内に置く事』

以前から不思議には感じていたけど、土台にはそういう事があつたのか。なら、他の奇妙なルールにも似たよつた ^{いわ}謂れがあるのかも知れないな。

「浩幸は徹夜になるんだろ？ 僕のベッド使っていいから、夜まで眠つておけよ」

僕が使つていたカップを持ち上げ、兄貴が笑いながら軽く肩を叩いてくる。

「俺も経験あるけど、ちょっとでも眠つとかないと完徹はキツイぞまあ、確かに。普段は日中のバイトしかしてないから、体力的にも精神的にもキツイかもしれない。」

せっかく兄貴がこう言つてくれているんだから、好意に甘えよう。

「うん、じゃあ、そうさせてもらつよ」

リビングにいる面々に声をかけると、僕は一階へ上がって行った。

階段を上がってすぐのドア。以前まで僕が使つていた部屋だけど、今は不用品が詰め込まれ、物置きとして利用されている。廊下を挟んだ向かいに母の部屋。そして廊下のドン詰まり。一番奥に兄貴夫婦の部屋がある。

ドアを開けて立ち止まる。いくら兄貴の許可をもらつたとは言え、そして、いくらベッドは個々の物とは言え、やつぱり人様夫婦の部屋で横になるのは気が引けるかな。

大判のケットを一枚借りると、久し振りに自分の部屋へ入つてみた。家を出る時に置いて行つた僕の荷物が、そのままになつていて思つた程埃っぽく感じるのは、窓を開けて空気の入れ替えをしてくれているからだろうか。

兄貴の部屋にあつたソファが、壁際に置いてある。その傍には、僕が残して行つた本棚が。目に付いた一冊を抜き出してソファに転がる。

やつぱり落ち着くな。

本のページをめぐりながら、窓を叩く雨音を聞いていふうちに、うとうとと眠りに引き込まれてしまつた。

真つ暗な空間に僕は立つてゐる。否、座つてゐるのか？ 良

く分からぬ。何も見えぬ。どこまで広がつてゐるのか知る事も出来ない、そんな闇の空間に僕はいる。

方向感覚も正常に働かないのだろうか。自分が今、上を向いているのか下を向いているのか、それとも横たわっているのか。それすら定かではない。

視力が効かないからだろうか。聴覚が敏感になつてゐるようだ。無意識に周囲の音を拾おうと集中している。

僕の耳が、小さな音を捕えた。細い音が途切れる事なく続いている。

何の音だ？ すぐ聞き慣れている気がする。それでいて、日常生活中で意識に上がつてくる事は薄い。そんな音だ。

僕がその音に気付いたからだろうか。急に耳に届く音が大きくなつた気がする。

これは この音は、川だ。

闇は音を吸収するのだろうか。それとも反響させるのだろうか。流れる、流れる、川の音。水の音。……の音。

何の音だつて？ 僕は自分の思考に疑問を投げかける。川の音以外に何が聞こえたつて言つんだ？

音の正体が知りたくて、全神経を耳に集中させる。

間断なく流れる水の音。その音に紛れて、確かに聞こえる。湿つた重たい物体を引きずるみたいな音。濡れた柔らかい物体を打ちつけるみたいな音。そして周囲に満ちる濃厚な気配。

自分の鼻先も分からぬ暗闇の中から、何かが僕の事をじつと伺つてゐる。僕が耳を澄まして辺りの様子を伺つてゐると同じようにな。

今にも闇のあちこちから無数の腕が伸びて来て、僕の体に掴みつかつて来るんじやないだろうか。

ほら、あそこに。こっちにも。僕をジッと見つめる目が。いや、もしかしたら、闇より尚深い虚ろがポツカリと。

「……くん……浩幸君。浩幸君、起きて、浩幸君」
肩を揺り動かされて、僕はハツと目を覚ました。

「あ？ ああ、義姉さん 」

「随分と良く眠つてたみたいだけど、疲れてるの？ 大丈夫？」

「ええ、大丈夫です」

目をこすりながら上体を起こす。眠つたはずなのに、頭の芯にジンとした痺れが居座つている気がする。

何だかひどく嫌な夢を見ていたと思うんだけど……内容が抜け落ちている。そして気持ちの悪さだけが残つているのだ。

「それにしても驚いたわ。向こうの部屋にいらないんだもの。一瞬どこに行つたのかと思つちゃつたわよ」

僕の手からケットを受け取り、義姉は穏やかに笑う。その顔を見

ながら、僕はちょっとだけ気分が落ち着くのを感じた。

「急に自分の部屋が懐かしくなつちゃつて。すみません」

やだ、どうして謝るの、浩幸君の家なのに。と笑う義姉に促されて部屋を出る。

すでに洗濯物の片付けられた浴室でシャワーを使い、こぎやかに夕食のテーブルを囲んでいた時に、夢の事はすっかり頭のどこかへ押しやられてしまつた。

時計が九時十五分を回つた頃、じゃそろそろ、と僕は腰を上げた。

「まだ雨降つてるから、自転車も荷物も、うちに置いて行きなさい。明日は大学あるんでしょ？」

夕食の片づけを終えた母が、カーテンの隙間から外の様子を伺いながら僕に声をかけてきた。

まだ降つてゐるのか。こりや、本格的に台風到来か？

明日の朝もう一度実家に寄り、休ませてもうつてから大学へ向かう事にして、僕は夜バイトへ。

雨は昼間より勢いを増している。確かにこの降りじゃ、自転車は置いて行くしかないな。自宅アパートから向かうよりも少々時間を食つけど、無理をしてビショ濡れになるよりもマシだ。

アスファルトに溜まる雨水を跳ね上げながら店に着いたのは、それでも予定していた時間よりも幾分か早かつた。

「おはよつじやこます」

たたんだ傘を振つて雨粒を飛ばすと、店内に設えられた傘立てに突つ込んだ。

「おはよつじやこます」

雨の日は床が泥で汚れるために、通常よりも多めにモップをかける。ちよつじドアの前をモップがけしていた店員が、僕の声に顔をあげて挨拶を返してくれた。

フロアマットで念入りに靴を拭い、事務所でタイムカードを押す。制服に袖を通していると、モップを抱えた店員が入つて來た。

「今日は安西さんなんですね」

「うん、中條さんの替わりでね」

ロッカーにモップをしまつと、口キ口キと肩を鳴らす。

「やな雨ですねえ」

「台風、來てるみたいだし。長引くかも」

軽く世間話をしながら身支度を整え終わる。

「こんな夜は、お客様も少ないだろうし。のんびりやるよ」

僕の言葉を聞いた店員は、浮かべいた笑顔を引っ込めて表情を改めた。

「安西さんって、この店の変なルール知つてますよね？」

「あの『傘立ては店内に』とか、『夕方五時以降は店の前に水をまいてはいけない』とかってヤツ?」

「そう、それです。でも一番大事なのは『明け方四時四十四分から

の四分間、店のドアを開けてはいけない』ですから、『気を付けて下さいね』

「うちの店のコンビニールで、最も訳が分からるのがコレだ。

『何なんでしょうね、このルール?』

首をひねっている僕に、明日の朝が来れば嫌でも分かりますよ。と説明にならない説明をした店員が、最後にポツリと付け加えた。「だから、絶対にドアを開けちゃダメですからね。忘れないで下さいよ」

振り向いて見た相手の顔は、全く冗談を言っているようでは思えなかつた。

夜十時を回ると、雨はさらに勢いを増した。わずかにドアを開けてみれば、近くを流れる川が普段とは違う騒々しい音を立てているのが分かる。

濡れたフロアマットを取り換え、出来るだけ乾いた上体をキープする。傘立てが店内にあるために、どうしても床が水浸しになってしまふ。レジの後ろにモップを持ち込み、人の途切れた隙を見計らつて床を拭く。

そう言えば、うちのコンビニに来るお客さんで、店内の傘立てを不思議に感じる人はいないようだ。

皆、当たり前のよう店の前で傘を振り、当然のよう店の中の傘立てに差し込む。

ふと僕の頭の中に、昼間家族と交わした会話が浮かんだ。

『家の前に雨を呼ぶ物を置くと、ガモウジャガやって来る』

そんな迷信が、地域に根付いていると言つ事なんだひとつと思つ。

『いやあ、すごい雨だねえ』

傘の滴を振り切つて店に入つて来たお客さんが、苦々しげに咳く。

『本当にすごいですねえ。このまま、本格的に台風が上陸しちゃうかも知れませんね』

レジに並べられたのはビール数本と、つまみ。指定された銘柄のタバコが一つ。今夜は家に籠つて雨をやり過ごすんだらう。ある意

味、うらやましい。

対人センサーの電子音が店内に響く。だが開いたドアから聞こえる雨音と増水した川の流れる音に、かき消されそうになる。

今夜最後の納品が十一時一十分。この天気じゃ、もうお客さんも来ないかな。のんびりと検品、陳列が出来そうだ。

しかし、本当にすごい降りだ。こりや土嚢を用意しといた方が、いいかも知れないなあ。

雑誌を並べ直しながら、窓の外の様子を伺つてみる。だけど風も出てきたようで、雨粒が窓ガラスに吹き付けられ、様子なんて分かりやしない。ただ、相当に激しい雨が降つていて、とだけ。

定時刻に遅れる事、数分。コンビニのドアの正面につけたトラックから、業者さんが走り込んで来た。

ほんの数秒の事なのに、風にあおられた業者さんのゴーフォームはすっかり濡れてしまつていた。

ドアを開き、僕も商品の搬入を手伝つ。よつやく全ての商品を運び入れると、サインの記入された伝票を持つて慌ただしくトラックに乗り込み、業者さんは去つて行つた。この雨の中、まだまだ納品に出向かなくちゃいけない場所があるんだろう。

大変だなあ。さつきはビールのお客さんをつらやましく思つたけど、業者さんに比べたら僕の方が楽だよな。

とりあえず雨風はしのげる訳だし、このまま朝までお客さんは来そうにないし。

そんな事を考えながら、スキヤナーを片手に商品をチョックしていく。

それにしても、凄い雨だ。こつこつのを例えて「空が抜けたような」とか「バケツを引っ繰り返したような」なんて言つんだろうな。店内に流れる音楽と雨の音をBGMに、のんびりと作業を進める。お客様さんは予想通りで、タクシーの運転手がトイレを借りに来たのと、トラックの運転手が夜食のカツ丼とおにぎりを買いに

来ただけ。静かなもんだ。

午前三時半に時計の針が達しようかといつ頃には、全くお客様さんは入らなくなってしまった。

誰もいないうちに僕も夜食を摑つておこうと、レジに鍵をかけて事務所へ向かう。ロッカーの中には、バイト前に購入しておいた菓子パンとジュースが入っている。

スチール机の上のビデオモニターの前に陣取り、パンをジュースで流し込む。視界にあるモニターには、誰もいない無人の店内が映つていて。

こうやって見ると、真夜中の無人のコンビニで、昼間にしている店とは別の雰囲気を持つていてんだなと思う。

辺りは真っ暗で、場違いに明るい店内放送、建物の屋根を叩く強い雨音と、腹の底に響くような低い川の水音。こんなのは、僕の知つている世界とは違う。きっと時計の針が午前零時を回つた瞬間、別の空間へジャンプしてしまつたんじやないか、そんな気さえしてしまつ。

僕の意識を刺激したのは何だったのだろう。対人センサーの来客を告げるチャイム音か？ それとも強さを増した雨の音か？

ハツとして目を覚ます。どうやら、知らないうちに眠り込んでしまつたみたいだ。僕が気付かないうちにお客さんが来ていたら、大変だ。『買い物に行つたのに店員が出て来なかつた』なんてクレームが来るかも知れない。

僕はそこまで考え、冷や汗をかんきながらスチール机から上体を起こす。頭を大きく振つてダルさを払い落すと、小走りに店内へ戻つた。

店の中は相変わらずガランとしていて、誰もいない。ドア付近の床にも、来客を示す水に濡れた跡は残つていない。最後に来たトラックの運転手が帰つた後、床をモップで拭いた。だから誰かが入つてくれば、床の上には水の跡か足跡が残るはずだ。

それを確認した僕は、ちょっと安心して息を吐いた。けど、店長には報告した方がいいだろうな。万が一のために。

でも、だとしたら、眠りから僕を引き戻したのは何だろう？

店の壁にかけられた時計に目をやれば、時刻は午前四時四十分をわずかに過ぎたところ。

『一番大事なのは明け方四時四十四分からの四分間、店のドアを開けない事。絶対にドアを開けないで』

同僚から聞いた言葉を思い出す。

『雨の夜には川から死者が這い上がりて来る』

『川の事故や増水で亡くなつた人のための供養をしなくなつてから、妙な噂が立ち始めた』

昼間、家族から聞いた会話の内容が頭の中を駆け巡る。背筋を冷たいモノが流れいく気がして、ブルッと全身に震えが走る。

「いや、そんなの……きっと何か他の原因があるんだよ。この時代に靈とか……ある訳ないし」

自分自身に言い聞かせるように呟くが、その声が空間に虚しく響く。と同時に、この店内にいるのが自身一人だけなんだと言う事を、強く意識した。

時計の針は僕の思考を嘲笑うかの如く、容赦なく進み続ける。

きっと深酒をした、たちの悪い酔っ払いでもやつて来るに違いない。だから、店のドアを開けないようにしろ、なんて妙なルールが出来たんだ。そうに違いない。

どうにかして自分を納得させようと、もつともらじい理由を見つけるために頭をフル可動させる。

吸い寄せられた視軸の先で、無情にも時計の針は四時四十四分を指してしまった。

キュウウイイイ 。

時計を見上げていた僕の後ろで、機械が起動するかすかな音がした。驚いて振り向くと、入り口脇に置かれているコピー機に作動を

知らせるランプが点つている。

どうしてだ？ 誰もいないのに、何でいきなりコッペー機が動き出さんだ？

もちろん、ビルのコンビニでも設置してある、一枚十円でコインを投入するコッペー機だ。待機状態にあるとは言え、勝手に動くはずがない。

笑いそうになる膝を動かしてコッペー機の前に立つ。コインの投入機にはランプが点いていない。つまり、硬貨は入れられていないう事だ。

「誤作動 か？」

何でタイミングだよ、驚かすなって。

フーッと息を吐き出す。電源を落とすとコッペー機に手を触れた瞬間。

ガ ッ

「うわっ！！」

いきなりコッペー機が動き出した。独特的の青緑色の光がガラスの原稿台と押さえの隙間から洩れ、セットされた用紙が送られる。

何の変哲もない、いつもと同じ機械の動作。……それが、誰もスタートボタンを押していない事を除けば、の話である。

用紙が一枚、排出トレーに吐き出された。その用紙に恐々と指先を伸ばす。まるで、真っ赤に灼けた鉄を触るようだ。得体の知れない、おぞましいモノに触れるようだ。

コピー用紙は、一面、トナーインクで真っ黒に塗り潰されていた。所々に見える、白く丸い空間は何だらう？

僕が用紙を確認した途端、再び機械が動き始める。光る、排出する、光る、排出する、光る、排出する、光る……止まらない。

トレーに溜まっていく用紙は、どれも同じように黒で塗り潰されているみたいに思えた。だけど。

「これって……風景か？」

「画質の悪い写真を、さらに白黒で粒子を粗くしてコピーしたように感じられる。

良く良く見てみれば、写っているのは通りの風景だ。最初に一枚は真っ黒だったせいで気が付かなかつた。丸い空白部分は、街灯の光だ。

コピー機は、相変わらず用紙を消費し続けていて、止まる気配はない。為す術もなくそれを見つめていた僕は、わずかな変化を認めた。

「店に近付いて来ているのか？」

写っているモノが景色だと分かれば　しかも、住んでいる町の景色なら　変化を見つけるのは簡単だ。

用紙に写し出された景色は、徐々に近付いて来ている。今、僕のいる、たつた一人でいる、このコンビニに。

近付いて来るモノが何なのか分からぬけど、マトモなモノじゃないって事ぐらい想像がつく。

降りしきる雨の音が、僕の耳に突き刺さる。足許から這い上がり来る寒気が、全身に毒のように回る。

こんな　こんなモノが写った紙を手にしていて、大丈夫なんだろうか？

そう思つた瞬間、自分の手の中にあるコピー用紙が、恐ろしく忌まわしい存在に見えてきた。放り出すよつとして手を離す。

ガ　　ツ　ガガツ

それ待つていたんだろうか。延々と紙を排出し続けていたコピー機が、ピタリとその動きを止めた。電源も落ちている。今の今まで勝手に動いていた事など、何かの間違いだったみたいに。店内の静けさと店外の雨音の対比が、耳に痛い。気付けばいつの間にか、点ネイ放送が消えている。

「何で　あり得ない……」

有線放送のスイッチは事務所にある。僕がここにいる以上、誰もスイッチには触れる事はないのに。

だが、その考えを頭を振つて払い落とす。現に今まで、誰も触れていないコピー機が動いていたじゃないか。僕の目の前で。一体、いつまで続くんだ、こんな事？

人間の習性なのだろうか。自然と視線が壁に掛けられた時計へと向かう。

「四時四十……七分……」

秒針は三十秒を示す「六」を越えたところだ。

店のドアを開けてはいけないとされる時間は、四時四十四分から四十八分までの四分間。だとすれば、禁忌とされてる時間はもうすぐ終わる。残り三十秒もない。四十八分を回れば、こんな訳の分からない事も終わるはずだ。

ゴールが見えた事で、僕の気持ちにも少し余裕が生まれた。

明け方五時にもなれば、朝刊も入つて来るし、仮眠をとるためのトラック運転手もやってくる。床の上にコピー用紙が散乱したまでは、さすがにマズイだろう。正直、触りたくないが、仕方がない。腰を屈めて、床に散らばった用紙を集め始めた。しかし、この用紙分のカウンターをどう店長に説明すればいいと言つのか？

カウンター数と投入金額が一致していないのは、照らし合わせてみればすぐに分かつてしまう。まさかとは思うが、僕が払うはめになるんだろうか？

そんな事を思いながら用紙を集めていた僕の手が、一枚の用紙の前で止まつた。

変わり映えのしない、黒く染まつた紙面に白く抜けたコンビニの店舗が認められる。その明りに誘われるよう、細い棒状のモノが何本も写り込んでいる。

「これは　？」

紙を持ち上げた僕は、視界の端に何かを見たような気がした。そ

つと顔をあげる。

どうして人は、こんな時に確かめようとしてしまうのか。絶対に見ない方がいいモノに決まっているのに、それでも確認せずにはいられない。

きっと田にする事で、大したことじゃないと自分に言い聞かせるためだ。『何だ、枯れ尾花じやないか』と。

そう、大した事なんかないんだ。冷静になれば、笑って話せるような事なんだよ。そうさ、そうに決まっている。

そこで

僕が

見たのは

ドアの隙間を

無理矢理

じじ開けようと

うぞうぞと蠢く

いくつもの

指 指 指 指

筋くれ立つた男の指

マニキュアに彩られた女の指

小さくむっちりとした子供の指

シワに包まれた老人の指

白くふやけて崩れかけた指

敗れた皮膚から骨の飛び出した指

折れ曲がった指

指 指 指 指

数え切れない無数の指が、わずかな隙間から店内に入り込もうと暗闇の中で蠢いているのだ。

指の波が動くたび、ドアのガラスがたわむ氣がする。今にも指達が店内に雪崩れ込んできそうだ。

思わず立ち上がりつて内側からドアを押さえる。正面から不気味な指と向き合つ勇気はない。だから背中でドアを押さえ、両足を踏ん張る。

あんなモノが店内に入ってきたら　？　到底、マトモな精神ではいられない。

背中にガラスを引っ搔く、微かな振動が断続的に伝わって来る。早く、早く、早く、早く終わってくれ！　このままじゃ、おかしくなってしまう。頼む、一秒でも早く、この時間が過ぎてくれれば！

首をひねつて壁の時計を見上げた。もう、随分と経つたような気がしていたが、まだ秒針は天頂を過ぎてはいなかつた。

まだか？ まだなのか？ 早く！ 早く！

ジリジリと焦る僕の思いとは裏腹に、秒針の進みは間延びして感じられる。

あと五秒。あと五秒で、この悪夢のような時間から抜け出せる。
あと四秒。まだか？ まだ四秒もあるのか？
あと三秒。背中に伝わる振動は消えない。
あと一秒。早く！ 早くしてくれ！
あと一秒。頼む！

秒針が 天頂を越えた。断続的に伝わってきた振動が、消えた。

「 終わった……のか？」

知らず、詰めていた息を大きく吐き出す。気付けば全身に冷たい汗が噴き出していた。手の平で額の汗を拭つた僕は、自分の両手が震えているのを目にして苦笑した。

「もう、大丈夫、大丈夫だ。時間が過ぎたんだから。もう、終わつたんだ」

ドアに背中を預けて、ズルズルと床に座り込んだ。

大きく頭を振つて、数分間の出来事を払い落そうと試みる。

忘れよう。忘れるんだ。こんな事、現実であるはずがない。忘れてしまえば、大丈夫。これから先、夜番のシフトに入らなければいいんだ。

自分に言い聞かせ、気持ちを切り替える。

仕事だ。仕事をするんだ。仕事に集中すれば忘れられる。立ち上がり、振り向いた僕の網膜に灼き付いたのは 。

白みかけた明け方の空をバックに、ドアのガラスに張り付いた
・巨大な顔。ガラス一面にブヨブヨとふやけた皮膚を波打たせた水
死者の顔。波打っているのは、皮膚の表面に無数の人面が浮かび上
がつては沈んでいるからだ。

藻のように揺れているのは、濡れた髪か。虚ろに見開かれた眼球
は白濁し、まるで腐った魚のような色をしている。膨れ上がった舌
が、だらしなく開いた口からダラリと垂れ下がり、ドアのガラスを
舐めている。

「ぎ……ぐうっ」

喉の奥に不快なモノがせり上がり、くぐもった声がもれる。そ
れに気が付いたのか、まばたきをしない濁った眼球がグリグリと動
く。色を失くした瞳が僕を捉えた瞬間。

僕の口から言葉にならない叫びがあふれ、そのまま意識を手放し
てしました。

次に僕が目覚めたのは、病院のベッドの上だった。心配そうに僕
の顔を覗き込む母と、兄貴夫婦の姿が見えた時、ようやく自分の日
常に戻つて来る事が出来た安堵感に涙が止まらなかつた。

コンビニの店内で倒れていた僕を発見した朝刊配達の人人が、慌て
て救急車を呼んでくれたらしい。

幸いにも外傷等はなく、疲労や偏った食生活による一時的なもの
だろうと言つ事で、僕はその日のうちに帰れる許可が下りた。

一体何があつたのかと家族にしつこく問い合わせたが、あの数分
間の出来事を口にする気はなかつた。口にすれば、どこまでのあの
「ガモウジヤ」が僕に憑いて来るような気がしたからだ。

あんなモノがこれから先も自分の生活の中に入り込むかも知れないなんて、正気じゃいられない。

大事をとつて講義を休み、実家で眠らせてもらつた。

居間に敷かれた布団の中で、僕は心に決める。

明日、店長に謝つて、そしてバイトを辞めさせてもらおう。あんな経験をして、あのコンビニでバイトなんて無理だ。

アパートも……引き払おうか。母と兄貴夫婦が許してくれれば、実家に戻るのもいいかも知れない。

可能な限り、コンビニにも川にも近寄りたくない。

あんなモノとの関わりなんて一切ない、平穏な一条を取り戻すんだ。

そう強く心に願つて、僕は眠りに就いた。

止む気配をみせず、降り続ける雨の中、窓の外から部屋の様子を伺う……この世ならざるモノの存在にも気付かずに。

そう、コンビニのバイトを辞める事は出来たんだけど、「ガモウジヤ」との関わりは切れる事はなかつたんだ。

今でも雨の日には、連中の気配を感じる。

窓の外から僕を伺い、隙あらば取り込んでしまおうと狙つている「ガモウジヤ」の気配を……。

了

家庭「ハマ」遠慮ぐだれ

「ひの近所にあるコンビニの、仲良くなつた店員さんから聞いた話。

そこのお店はバイパス沿いにあつて、大手ラーメンチェーンの店舗やファストフードの店舗と駐車場を共同で使用している。深夜まで営業しているためか、利用客も多く、食事に来た人がついてにタバコや雑誌を購入していくので、売り上げも上々のようだ。我が家から道路を挟んで斜向かいにあるそのコンビニは、私にとって非常にありがたい存在で、調味料が切れた時や料理をもう一品増やしたい時などに重宝している。

あまりにも近くにあるために、一回も四回も行つてしまつてしまつかり常連として店員さん達に顔を覚えられている。

ホットコーナーの一押し商品や新しいデザートメニューが入ると、感想を求められる事もあつたりするし、見えにくいレイアウトについて意見をしたりもする。

そんなどから、店員さんが手空きの時に話を聞くよつこなつた。

「ねえ、今日、これからヒマ?」

雑誌コーナーを物色していた私に、そつと近寄つて来た店員さんが声をかけてくる。

「え? ああ、驚いた。佐山さんか、びっくりするじゃな?」

私は手にしていた雑誌を棚に戻すと、声をかけてきた顔馴染みの店員、佐山さんに笑いながら返事をした。

「あたしね、もつすぐ上がるんだけど、那儿のお店でお茶でもどう?

？」

そう言つて向かいにあるファストフードの店を指差す佐山さん。

何か目的の物があつた訳でなし、時間潰しに雑誌を見に来ていた私は、佐山さんの申し出にすぐさまOKを出した。

「じゃあ、私、先に行つて待つてるわね

私は手頃な一冊を棚から抜き出すと、佐山さんに手を振つてレジへ向かつた。

お昼時にはまだ時間のあるファーストフード店はガランとしていて、ゆっくりできそう。

大声ではしゃぎ回る子供も、傍若無人な学生達もいない。
終日禁煙になつてタバコが吸えないのは残念だけど、この静けさには代えがたい。

アイスミルクティーを求めるど、窓際の席に座つて買つたばかりの雑誌をめくる。

十分程待つと、仕事を終えた佐山さんがやつて來た。

「ごめんね、待つたでしょ？」

ポテトとコーラの載つたトレイを手にした佐山さんが声をかけてくる。

「気にしないで。どうせ家にいたつて、誰もいないんだし。」
つて佐山さんと話をしてた方が、私も楽しいわ

我が家には子供がいない。欲しくなかつた訳ではない。私に問題があるのか、主人に問題があるのか、はたまたほかに何があるのか、私達夫婦に子供が授かる事はなかつた。

主人が仕事に出かけてしまえば、残された私は一人、時間を潰すしかない。外に出て仕事をする事も考えたけど、それは主人に却下されてしまった。

「あ、コレ、食べてね」

私の向かい側に座ると、佐山さんはトレイの上のポテトを勧めてくれる。

汗をかいだカップを手にして中身を一口すすり、彼女は大きく息をつく。

「今日はどうしたの？ 何だか話があるみたいだつたけど
ポテトを口に運びながら、佐山さんに水を向けてみる。

「そうそう。ちょっと話を聞いて欲しくて」

途端に佐山さんは身を乗り出してきた。

「うちのゴンベーって、駐車場広いじゃない？ おつきい通りの近くだから、夜でもお客さん多いし」

佐山さんの話によると、こうだ。

ファストフード店と隣接し、大手ラーメンチェーン店と敷地を同じくするために、ゴンベーの駐車場には深夜になつても車が途切れる事はない。

そのせいか、家庭ゴミを持ち込んでゴッソリと捨てて行く不心得者が後を絶たないのだとか。

「それも、可燃ゴミとか不燃ゴミとかじゃないのよ」

動かなくなつた扇風機、使えなくなつたガスコンロ、破れてスパンジの飛び出した座椅子、折りたたみのスチール椅子、引越しの時に不要になつたのだろう古いエアコンやストーブ。

果ては事故で外れてしまつたらしき車のボンネット。処分に困つた古タイヤを置いていく強者もいるらしい。

「見つけた以上は、そのままにしておく訳にもいかないじゃない？ だけど普通のゴミとかビン・カンなんと違つて、ゴミの田にまとめて持つて行つてもらつてのも無理な訳よ」

「そうよねえ。そのラインナップを聞く限りじゃ、粗大ゴミだもんねえ」

アイスミルクティーを口に運びながら、佐山さんの話に相槌を打つ。

「でしょ？ 結局、うちのお店から業者に連絡して引き取つてもらう事になるんだけど。物が物だけに、処分料金がかかるじゃない？ 不燃で持つてつてもらえる物はいいけど、それ以外の物つて、うちで処分料払うのよ。でもそれつて、おかしくない？」

だんだんと佐山さんがヒートアップしてくる。

「ちょ、ちょっと佐山さん、落ち着いて」

慌てて彼女の前で手を振り、どうどうと落ち着かせる。佐山さんもハフウと息を吐いて、背もたれに寄りかかる。

「ごめん、話してたらテンションが上がつてしまつた。なんかこ

んな事が続いて、お店の持ち出し分が増えちゃったせいで、本部から色々と言われたらしいのよ、うちの店長。そのせいでイライラしてるみたいでさ。働いてるこつとまで、ピリピリしちゃうわよ」

「それでね。これ以上雰囲気が悪くなるのも嫌だからって、スタッフでも注意してたのね。ゴミ置き場にネットをつけたり、大きい物が置けないように囲いをつけたり」

夜シフトのバイトに入る人が、時間のある時に見に行つたりもしていたようだ。

「ふうん。で、効果はあったの？」

「残り少なくなつたポテトを口の中へ放り込み、噛み締めながら佐山さんは複雑な表情になつた。

「う……ん。多少は効果があつたのかな。家庭ゴミや粗大ゴミなんかにはね」

「他に何か問題でも？」

私の問いにどう答えるかと悩むように、彼女は手にしたカップのストローを抜き差ししている。そのたびにカップの中で、クラッシュアイスがザクザクと音を立てた。

「何か変な事でも？」

「それがさあ。朝から変な物、見つけちゃつて」

佐山さんは今朝、六時からのシフトだつたそうだ。

習慣として、仕事を始める前にゴミの確認をするようにしていて、今朝も店舗の裏を見に行つたんだとか。

「田立つ所にゴミが置いてあると、『ここに捨てていいんだ』って思っちゃうじゃない？だから、出来るだけキレイにしておこうと思つて。そうしたら、うちのコンビニで使つてるとかは違つ袋が置いてある訳よ」

白い半透明のビニール袋。その中には幾つもの茶色い紙袋。よほど見られたくない、知られたくない物が入つてゐるのだろうと、容

易に想像する事が出来た。

「持ち上げてみると軽いんだけど、もしも危険なモノだつたらヤバイでしょ？だから店長が来るまで待つて、一緒に確認しようと思つて」

一人で確認するの嫌だつたし。そう言つて佐山さんは肩をすくめた。

店長に事情を説明し、一人でビニール袋の結び口を解き、中身を確かめることにした。入れられていた紙袋は、表面が「デコボコ」としており口を無造作にひねつて閉じられている。その形容から、ある程度の硬さを持つ物が詰め込まれていると想像できた。

店長が恐る恐る紙袋を開く。口を開き、中を覗き込むなり、店長は「うつ！」とうめいてのけぞつた。

「どうしたんですか！？」

と近寄る彼女に向かつて、店長は紙袋の中身をザラザラと引っ繰り返して見せた。

「中身を見たあたしも、思わず叫びそうになつたわよ」

そう言つて佐山さんは携帯電話を取り出しきつつのボタンを作した後、画面を私に見せてくれた。

「コレが入つてたのよ」

彼女の携帯画面に映し出されたのは、段ボール箱に入れられた無数の人形の腕。

古いモノ、新しいモノ、汚れているモノ、布製のモノ、右腕、左腕、ぬいぐるみの腕。

考え付く限りの人形の腕が箱の中に散乱している。

「気味が悪いでしょ？ 入つてた紙袋の中身、全部コレなのよ」

これだけの数の腕を集めるために、一体どれだけの人形を壊したのだろう。十体や二十体という話ではない。

肩の可動域で引き抜かれたモノから、ハサミで切り裂いたモノも力任せに引き千切られたモノもある。

人形の腕とは言え

人形の腕だからか

籠められた悪意が携

帯の画面から吹き付けてくるみたいだ。

「……コレ、どうするの？」

「誰が置いたのか分かれば、突っ返してやるんだけどね。でも誰だ

か分かんないし、外に出しとく訳にもいかないじゃない？ 仕方がないから、箱に詰めて事務所に置いとくんだつて」

「えー？ それって気持ち悪い？」

「気持ち悪いわよ！ 今のところ、知ってるのは店長とあたしだけなのよね。だから、事務所に入るたびに、見たくないのに見ちゃうの。この箱」

怖いモノ見たさ、ってやつか。佐山さんの気持ちは分からぬでもない。私が彼女でも同じように思うんだろう。

話して何がどうなる訳でもないけれど、それでも誰かに聞いて欲しかつたんだと彼女は苦笑した。

「だってお店の子に話す訳にはいかないし。でも、自分一人の中にしまったおけるような話でもないし。『ごめんねえ、気持ち悪い事聞かせちゃつて』

一通り話して気が済んだらしい佐山さんと別れ、家へと帰る。

「ただいまー」

小さく呟いて居間のドアを開ける。私の声に応えてくれる者はいない。

テレビを点けると、お昼番組のにぎやかな笑い声が居間に流れる。バラエティにも、それに出ているお笑い芸人にも興味はないけど、静まり返った空間に一人でいるよりもマジだと思えた。

佐山さんと時間を潰したせいで、昼食には中途半端なタイミングだけど、今食べておかないと夕食まで空腹のままになってしまつ。キッチンへ向かうと冷蔵庫を開け、物色する。

「簡単でいいよねー」

誰に聞かせるためでもなく、ただ自分のために声を出す。淋しい

クセだとは思う。だけど独り言をやめてしまつたら、しゃべり方を忘れてしまうんじゃないかもと思つてしまつ。

食パンにピザソースを塗り、ハムと昨日の残りのホウレン草のソテー、とろけるチーズを載せてトースターで焼く。ちょっとだけ手間をかけて紅茶を淹れる。

自分のための食事の用意なんて、こんなものだ。どんなに手間ヒマかけて作った料理でも、一緒に食べてくれる相手がいなければ美味しくとも何ともない。

【なんちやつてピザースト】の香ばしい匂いが漂い始めた頃、電話が甲高い電子音で着信を告げた。

「はい、倉田でいります」

受話器を耳に当てるど、聞き慣れた主人の声が届く。

『ああ、もしもし？ 佳子か？ さつきも電話したけど、どうが行つてたのか？』

私が留守の間に、一度電話をしたらしい。

『そうなの？ ごめんなさい、佐山さんとお茶してたから』

『佐山さん ああ、コンビニの店員さんか。お前と仲がいつて言ひ』

『そりそり、その佐山さん。彼女からね、ちょっと変な話を聞いたのよ。帰つたら教えてあげるね』

『んー、それがなあ。今晚、遅くなりそうなんだ』

『え？ だつて、あなた、最近ずっと忙しかつたから今日は早く帰るつて。だから今晚は、あなたの好きな献立にしようと思つて、私は張り切つてたのよ』

『そんな事言つたつて、仕方がないだろ？ いっちは仕事してるんだ。それぐらいお前だつて分かるだろ？』

何よ、ソレ？ まるで、仕事をしている自分が偉くて、家にいる私が駄目な人間みたいな言い方じやない。

『何時に帰れるか分からないから、待つてなくていいぞ。じゃあな』

私の返事を聞きもせず、主人からの電話は一方的に途切れてしま

つた。

虚しく音を吐き出し続ける受話器を戻す頃には、すっかり食欲をなくしてしまっている自分に気が付いた。

トースターの中に入れっぱなしになっていたせいで、パンの水分は完全に飛んでしまっている。食欲があつたつて、食べよつと思つシロモノじやないだろう。

もつたいないといつ氣持ちはあつたけど、取つておいてもきっと食べない。少しだけ後ろめたく思いながら、それでも主人への腹立ちの方が勝つて、結局、ゴミ箱へ捨ててしまつた。

すっかり冷めてしまつた紅茶を口に含むと、ただ甘さだけが残る。そしてそれは、渋味を伴つた苦みへと変わる。

まるで今の私の気分みたいに。

何だかもうどうでも良くて、紅茶も流しに捨ててしまつた。冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、居間のソファに身を沈める。

一人しかいない夫婦なのに。いつからこんな風にすれ違つようになつてしまつたんだろう。

新婚の頃だつて忙しかつたけど、もつと会話もあつたし、二人の時間だつてあつた。

結婚から数年経つても、子供が授からない事に不安を持ち始めた頃からだらうか？ それとも、もつと以前から？

帰宅の時間が遅くなる日が続き、二人で夕食を摂る機会もめつきり減つてしまつた。私が就寝してから主人が帰つて来る夜が増え、会話もなく主人が出社していく朝も増えた。

どんどん心を重くしていく思考の渦から抜け出せつと、ミネラルウォーターを口にする。

ガラス製のローテーブルの下に視線をやれば、オレンジ色の小物入れが。中身は作りかけの人形と、その材料の紙粘土。

先日久し振りに会つた友人が、暇潰しにいいわよ、と教えてくれたプチアートだ。紙粘土で人形やミニチュアのインテリアを作り、

絵具で着色する。

細々した作業は、殊の外、私の性に合っていたらしい。作つてい
る最中は、余計な事を考えないで済んだ。

どうせ今夜も私一人。主人の帰宅時間を気にして食事の用意をす
る必要もない。

私は小物入れをロー テーブルの下から引っ張り出し、フタを開け
た。聞く気もないバラエティの笑い声をBGMに、容器の中から作
りかけの人形を取り出した。

掌に乗せて、色んな角度からながめて見る。一度乾いてしまった
ら、作り直しがきかないのが紙粘土。歪な形で固まってしまった人
形は、まるで今の私自身のようで、見ているのが嫌になる。私は
目を閉じて大きく息を吐くと、手の中の人形をゴミ箱へ投げ入れた。
ウエットティッシュのボトルを引き寄せ両手を拭い、パックに保
存してある新しい紙粘土を取り上げる。

必要な分だけを指で千切り、小さく丸めて体のパーツを作つてい
く。爪楊枝の先で凸凹をつけながら、私は佐山さんから聞いた話を
思い出していた。

『ビニール袋に詰め込まれた人形の腕』

一体誰が、何の目的でそんな事をしたのか、無性に気になる。
「何を思つて、そんな事したのかしらねえ」

独り言を呟きながら、手の中の紙粘土に細工を続けた。

週が明け、冷蔵庫の牛乳が切れているのに気付いて、コンビニへ
向かう。ついでに何か、つまめる物があるといいんだけど。

店内に入ると、佐山さんがレジにいるのが見えた。

「いらっしゃいませ」と声を掛けてくる彼女に軽く頭を下げて、カ
ゴを手に店内を回る。

牛乳とスナック菓子の袋をカゴに入れ、佐山さんの前へ。

「お願いします」

「はい、いらっしゃいませ」

バーコードをスキャンしていく佐山さんに、さりげなく話を振る。

「例のアレ、その後どうなりました？」

彼女はチラッと私の後ろを見て、他のお客さんがいないのを確認すると声を潜めて言つた。

「実は、まだ続いてるのよ」

「ええっ、そうなの？」

「後で電話してもいい？」

「そうして。私も気になるし」

佐山さんからボールペンを借りると、レシートの裏に自分の携帯番号を書いて手渡した。

次のお客さんが並んだ気がする。

「じゃ、また後でね」

そう言つて手を振ると、商品の入ったビニール袋を受け取つて口

ンビニを出た。

自宅へ戻り、窓を開けて部屋に風を通す。今日は、うちに来てもらつてゆっくり話そう。どうせ夫は、私の起きているうちに帰宅しないんだから。

お茶の用意をするために、ケトルをガスにかける。ソファの周りをザッと片付け、ローテーブルの上の雑誌をラックに放り込む。トレイにカップを並べ、ハーブティーのボトルを開けた時、カウンターの上の電話が鳴つた。

佐山さんに渡したのは、私の携帯番号。ならばこの電話は彼女ではない。

ディスプレイに点滅しているのは、“非通知”の文字。これを見ただけで、どのような電話なのかおおよその見当がつく。

小さくため息を吐き、受話器を耳に当てる。

「もしもし、倉田ですが」

私の言葉に返答はない。受話器の向こうで息を潜めて「ちりり」とつていてる気配がする。

「もしもし?」

黙つている相手に語りかける事程、苛立ちと徒労感をもたらすも

のない。大きく息を吐くと、私は電話の主に告げた。

「切れます」

せめて」」」ちから切つてやる」」と思つたのに、相手は私の言葉を聞くなり、一方的に通話を終了させてしまった。

何度もかのため息をつき、受話器を戻す。

「あ……またか」

佐山さんから初めて話を聞いたあの日、主人から遅くなると連絡があつたあの日、あれからかかつて来るようになつた無言電話。多い時は一日に四、五回かかつて来る。それも、主人のいない日中を狙つて。

主人にも話してみたけど、「間違い電話じゃないのか」「気にするな」で終了。私の話の内容をしつかり聞いてくれていたのかさえ怪しい。

最近はずつとこんな感じだ。まともに顔を合わせて話をする事も、めつきり減つてしまつた。こんな状態で、夫婦と言えるんだろうか？胸の奥に大きく重い石を抱えたみたいな気分でソファに腰掛けると、ローテーブルの上の携帯電話が鳴り出した。

ディスプレイの番号は知らないものだけど、このタイミングで電話をかけて来るのは佐山さんしかいないうつ。

「はい、もしもし？」

『あ、もしもし、佐山ですけど。倉田さん？』

「うん。もう仕事、終わつたの？」

他愛のない、日常の挨拶だけど、今の私にとつて何よりも有り難いもの。

「うちに来て話さない？ 場所、分かる？」

『前に教えてもらつたよね。確か、通りの斜向かいにある、倉庫の一件隣だつけ？』

「そうそう。窓から見てて、声かけるから」

『分かつた。よろしくね。じゃあ』

「コンビニからなら、うちまで五分とかからない。」

ちょうど湯気を吐き出し始めたケトルをガスから外し、ポットに移してから窓辺に立つ。

程なくして、門の前に佐山さんの姿を認めた。

「佐山さん!」

窓を開けると、私は彼女に声をかけた。

「ちょっと待つてね。今、玄関を開けるから」

佐山さんが笑つてうなずいたのを確認して、玄関へ小走りに向かう。鍵を外してドアを開ければ、片手を挙げて佐山さんが声をかけてくる。

「「めんなさいね、ゆっくりしてるとこに」」

彼女を招き入れながら、その言葉に苦笑した。

「何言つてるのよ。どうせ一人で時間持て余してるんだから、遠慮なんてしないで」

用意しておいたカツプを並べ、ゆっくりとハーブティーを淹れる。「ごめんなさいね。こつちから誘つたのに、大したモノ出せなくて」お菓子を盛つた皿をテーブルに置き、佐山さんに勧める。ひとしきりお茶で喉を潤した後、彼女はポケットから携帯を取り出すと口を開いた。

「それでね、例の話なんだけど

「そうよ、あれからどうなったの?」

話の前に、ちょっとこれ見てよ。そう言つて差し出された携帯の画面には、以前と同じような人形の部品が写し出されている。

「……何よ、コレ」

一枚目写真には、カッターナイフのような刃物で傷付けられた人形の胴体部分。二枚目には引き抜いたと思われる、人形の髪の毛。三枚目には目の部分をくり抜かれた頭部。四枚目には、その眼球部分。

「どんどん酷くなつてるような気がするんだけど

携帯を返しながら感じた事を口にすると、受け取った佐山さんもうなづく。

「やつぱり倉田さんもそう思う？ 何だか、こう、物凄い恨みとかが漂つて来るじゃない。気味が悪いとか言つレベルを通り越してるよね」

少しの間、私達のいる空間に沈黙が流れた。心なしか下がつてしまつた体温を上げようと、ハーブティーを口に運ぶ。

トウルルル

沈黙を裂く電話の呼び出し音に、一人してビクッと飛び上つた。

「あ、ああ、ちょっとごめんなさいね」

佐山さんに断つて、キッチンカウンターの電話に出る。

「はい、倉田で」やります」

受話器を取る直前にチラッと田にしたディスプレイの文字は、「非通知」。

嫌な予感がしたけど、私一人でいる訳でもないので、鳴らしつ放しにも出来ない。案の定、耳に当たる受話器から言葉が返つてくる事はなかつた。

「はああ

佐山さんがいるにも関わらず、私は思わず大きなため息をついてしまつた。その瞬間、受話器の向こうでかすかに空気の動いた音がした。

笑つたのだ。そう気が付いた途端、相手は電話を切つてしまつた。

「どうしたの？」

佐山さんが声をかけてくれて、私は我に返つた。

「え？ ああ、何でもないの」

受話器を戻すと、横に置いておいたハーブのボトルを持ち上げる。それをテーブルにあつたティーポットと交換してキッチンへ。

「何でもないって顔色じゃないわよ。あたしじや頼りないかも知れないけど、話を聞くぐらいは出来るんだからね」

むうつ、と頬をふくらませる彼女の顔を見て、つい吹き出してしまつ。

「あー、笑つたわね」

「フフツ、『ごめん』『めん』

キレイに洗つたポットをお湯で温め、佐山さんのところに戻る。

「実はね

新しいハーブティーを淹れながら、私はここ最近続いている無言電話の事を説明した。ひとしきり私の話を聞いた佐山さんは、眉間にシワを寄せて口を開いた。

「ねえ、それって、ご主人に言った?」

「うん。無言電話が始まつてすぐに主人には言つたんだけど。でも全然相手にしてくれないの」

一つのカップにハーブティーを注ぐ。爽やかな香りが室内に漂う中、クセのなか人差し指の第二関節を噛みながら佐山さんは考え込んでいる。

「佐山さん?」

ハーブティーのカップを勧め、彼女に声をかけると難しい表情のまま私を見る。

「ねえ、間違つてたら『ごめんなさいね』もしかしてそれって、ご主人の

言いにくそうに語尾をぼやかす佐山さんに、私も肩をすくめて答えた。

「あなたもそう思つ?」

主人の態度がよそよそしくなり、家に寄り付かなくなつた。それと時を同じくして始まつた無言電話。『もしかしたら?』という思いは常にあつたけれど、その考えを肯定するのは嫌だつた。

「さつきの電話でね、私も確信が持てたわ。電話の向こうで、笑つたのよ。こっちの様子を伺うみたいに。あれは女だわ」

話をしながら、私は自分の言葉を否定する。

あれは「楽しんで」いたのだ。無言電話と主人の態度に疑心暗鬼に捕われていく私を思い描き、哀れみ、嘲笑つていたのだ。主人に相手にされていない私を、受話器の向こうの女は勝ち誇つて笑い声をあげたのだ。

「あたしが言う事じゃないと思うけど……。大丈夫なの？」少しの間黙り込んでしまった私に、佐山さんが心配そうに声をかけてくれた。

「ありがとう、大丈夫よ。何となく予想はしてたし」「苦笑してカップに口をつける。そして彼女に言った。

「ごめんね、変な話聞かせちゃって」

妙に沈んでしまった空気を拭うように、私と佐山さんは他愛のない話をし、コンビニに持ち込まれる得体の知れない「ゴミ」とやの持ち主について推測を交わした。

「もうこんな時間？ そろそろ帰らなくちゃ」

佐山さんがそう切り出したのは、陽も傾き、風も涼しくなった頃。

「ごめんなさいね、長々と引き止めちゃって」

玄関へ向かう佐山さんを送り出しながら、私は笑顔で声をかけた。「ねえ、話を蒸し返すようで悪いんだけど。ご主人の事、はつきりさせた方がいいかもよ」

靴を履いた彼女が振り返り、心配そうに口を開く。

「う……ん。でも、そうと決まった訳でもないし」

あいまいに笑って見せる私に、佐山さんが続けて言つ。

「倉田さんの家庭の事だから、あたしがとやかく言う筋合じゃないけど。だけど、万が一の時のために、記録はとつておいた方がいいかもよ。無言電話のかかってきた日時とか、ご主人の帰りの遅い日とか」

真剣な口調で話してくれる佐山さんの全身から、心配してくれている気持ちがヒシヒシと伝わってくる。

「そうね、ありがとう。そうしてみるわ」

困った事や嫌な事があつたら、いつでもメールして、との言葉を残し、佐山さんは帰つて行つた。

食器を片付けようとリビングに戻つて、思う。誰もいない部屋つ

て、こんなにも広かつたかしら、と。

すっかり体に馴染んでしまったため息を吐き出すと、食器を流し
へ運ぶ。どうせ今夜も主人の帰宅は遅いのだろう。そう思つたら、
急いで食器を仕舞つ氣にもなれず、そのままにしてしまった。

ソファに深く腰かけ、視界にも思考にも入れないようにして
いた雑誌ラックへ目をやる。放り込まれた雑誌や新聞の間に、A4版の
茶封筒が入っていた。中身は分かつていて、頼んでおいた書類と写
真が数枚。

昨日の朝届いたのだけれど、ラックに放り込んでそのままにして
おいたのだ。

ほんの一瞬だけ、どうしようか迷い 私はラックからその茶封
筒を抜き出した。封を切り、納められていた書類に目を通す。
面白くもない文字の羅列を追いながら、頭の中を様々な考えが浮
かんでは消えていく。

書類から顔を上げ、ふうつ、と大きく息を吐いて目を閉じる。

次々に頭の中を横切つていった思考の波の中から、幾つかのもの
が浮かび上がってきた。佐山さんの話、見せてもらった数枚の写メ、
コンビニに持ち込まれるビニール袋、人形の部品……。

「そつかあ。そうよねえ

閉じた目蓋の上に腕を乗せ、私は自分が久し振りに笑っているの
を感じていた。

「何だか最近、顔色がいいんじゃない？」

佐山さんが私の顔を見て、嬉しそうに声をかけてくれる。

「表情も明るくなつたみたいだし」

「そう？ ジやあ、ストレス発散がうまくいってるのかな

彼女の様子に、私も少し嬉しくなる。

『たまにはさ、外で食事でもしない？ 家の中にずっと籠もつて
と、気が滅入っちゃうでしょ？ あたし、今日は五時であがりだか

佐山さんからせつ連絡が入ったのは、毎過ぎの事だった。きっと、あの時の事を気にして誘ってくれたんだと思う。私は佐山さんの心遣いを有り難く受ける事にした。

「その様子だと、問題は解決したのかしら?」

テーブルに運ばれてきたセットのサラダをつつきながら、佐山さんがこちらへ探しを入れてくる。

「ふふ。残念ながら、解決はしないの」

目の前にあるコーヒー カップにミルクを注ぎ、私は彼女に答える。『全て解決して、何の問題もないわ』と言えればどんなに良かつたか。

でも、それは言えない。相変わらず主人の帰りは遅いし、無言電話も続いている。それどころか、今では休みの日まで言えを空けるようになった。きっと女性の所へ行っているのだろう。

「それなのに? 何でそんなに楽しそうにしているの?」

フォークに刺したレタスを口へ運ぶ事も忘れ、心底不思議だと顔中で表現しながら佐山さんが問う。

「んー。考え方を変えたからかな。『そうなのかも知れない』って疑つてる間はすごく苦しかつたけど、認めちゃつたら、何だか逆に落ち着いちゃつたのよ。主人が勝手にしてるんだつたら、私も勝手にさせてもらおう、つて」

「コーヒーに口をつけ、さらに続ける。

「それに、さつきも言つたけどね。ストレスを発散する、いい方法も思いついたから」

私の答えを聞いた佐山さんが、ため息をついて首を振る。

「へええ。すごいわね、倉田さん。あたしだつたら、絶対にムリだわ。あなたみたいに落ち着いてなんかいられないわね。それこそ刃物持ち出して、相手の家に乗り込んじゃうかも」

「うん、実は、私もそれ考えた」

流石に実行には移さなかつたが、その考えが私の中にあつたのも

事実である。

「でも、まあ、倉田さんが元気そうで良かつたわ。 つて、良くないか。解決した訳じゃないんだし」

佐山さんは、どう捉えていいのか迷っているんだろう。複雑な表情をしている。

「心配してくれて有り難う。本当に大丈夫よ。空元気じゃないから、安心して」

彼女に笑いかけると、私も並べられた料理に手を伸ばす。

「あ、ねえ。さつき言つてたストレス発散の方法つて、どんなの？」テーブルの上の皿があらかた片付いた頃、思い出したように佐山さんが質問してきた。

皿を下げに来た店員にコーヒーのおかわりを頼み、私は佐山さんに向き直った。

「ネットのね、アンケートモニターに登録したのよ。そこで、いろんなコンビニースイーツのレビュー依頼があつて。この年になつて『やけ食い』つてのもみつともないでしょ？ でもこれなら『レビューを書くんだから』つて言い訳も出来る訳よ。で、そのコンビニースイーツを夜中に、散歩がてら買いに行くの。レビューの依頼だから、ちゃんとレシートを送ればお金も戻つてくるし」

私の説明に佐山さんも納得する。

「趣味と実益を兼ね備えたつてヤツね。あたし達ぐらいの年齢になると、甘い物を食べるにも言い訳が必要になつてくるし」

「でしょ？ でも、太るわよ、やっぱり」

穏やかな空氣の中、食事を終えた私達は、佐山さんの仕事が翌日は休みと言つこともあつてそのままアルコールへと移つていった。

「ねえ、そう言えば佐山の方はどうなの？ あの深夜のゴミ捨て犯」

アルコールによつて程良く酔いが回つてきた頃、私はそつ切り出した。

「『深夜のゴミ捨て犯』？ 何だかそう言つと、ミステリーみたい

じゃない。すごいネーミングね」

「夜中にこつそり意味の分からない『ミミ』を捨てて行くつて、十分にミステリーだと思うけど」

「確かにそうかもね」

あはは、と笑う佐山さんにひられて私も笑う。

「少しほおさまってきたの?」

「ううん。エスカレートしてきた感じ。この頃じゃあ、人形だけじゃなくて、写真とかまで捨てられるようになつてきてね」

「写真?」

口当たりのいい甘く香るカクテルを含み、佐山さんに先を促した。「どうやらね、隠し撮りをした写真みたいで。男女二人組が写つてるらしいんだけど、顔までは判別できないの」

ハマつていてると言う焼酎のグラスに浮かぶ氷の塊を指先で沈め、頬杖をついて鼻の頭にシワを寄せる佐山さん。

「顔が写つてないって事?」

「それが違うのよ。多分、顔もハッキリと分かるよつて写つてるわね、あれは。探偵とか使って撮つたんじゃないかしら」

香りと口当たりにだまされてしまうが、プランテーベースのカクテルは思つていたよりもアルコールが強いらしい。私も佐山さんと同じように頬杖をつき、グラスに添えられたレモンを指先で液体の中へと沈める。

「それじゃあ、その写真つて」

「うん。浮気の証拠写真じゃないかって思つてるんだ。でね、塗り潰されてるのよ。二人の部分だけ黒いペンで丁寧に、しつこいくらいに。他にも、空いてるスペースには細かい文字でビッシリと『殺してやる』とか『死ね』とか書き込んであるし。もう、軽くトラウマよ」

佐山さんは下唇を突き出すと、ぶふーっと息を吹き前髪を揺らした。そのうんざりとした様子に、私は苦笑するしかない。

「写メ、まだ撮つてるの?」

「ううん、もうやめたわ。だって何だか、嫌じゃない。」うちの携帯までどうにかなりそうで

「ああ、そう思うよね。やめて正解だと思うわ」

その後は一人してお酒を飲みながら、日々や仕事のグチを交わして過ごした。

店を出て佐山さんと別れ、家に帰り着いたのは夜の十時半を少し回った頃。玄関のドアを開けると、リビングに明りが点いているのに気付く。

視線を向ければ、上がり口に主人の革靴が脱ぎ捨てられている。普段ならば、こんな時間に帰つて来る事は、まずない。

「ただいま」

様子を伺いながらリビングのドアを開けると、ソファに腰かけてビールを飲み、テレビを見ている主人の姿があった。

「今頃まで、何してたんだ。ずい分と遅いじゃないか」

私が声をかけると、不機嫌そうな表情を浮かべて言い放つ。ご丁寧に、手にしたビールの缶を乱暴にテーブルに置くという、おまけ付きで。

「佐山さんと食事に。今夜も帰りは遅いと思っていたから」

バッグをダイニングテーブルに置いて、冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを出す。良く冷えた水で喉を潤し、火照った頬をボトルに当てて言葉を返す。

「何だ、お前。酒飲んでるのか？」

私を見る主人の目が怒りを含む。

「食事の後に少しね」

「亭主が外で一生懸命働いてるつて言つのに、女房は優雅に酒飲んでご帰宅はな。まったくいい身分だよ、お前は」

棘をまとつた言葉が次々と飛んで来る。

「だつてあなた、こんなに早く帰つて来る事なんてないじゃない。私だつて楽しく夕食を食べたつていいでしょ？ あなたみたいに外に付き合いがある訳じゃないんだし」

いつも私を放つたらかしにして、自分はあるの女と一緒にいるくせに。私を一人にして、淋しい食事をさせているくせに。たまに外出をしたからって、どうしてそんなふつに言われなくちゃならないのよ？

「佐山さんとなんて言つて、本当は男でもいるんじゃないのか？」外したネクタイを缶ビールの横に放り出し、主人がボソリと呟く。売り言葉に買い言葉というヤツだろう。だけど主人のその言葉を聞いた瞬間、私の中に怒りが湧き上がってきた。

責められるべきは、主人のはず。なのに何故、私の方がこんな事を言われなくてはならないのか。

「どこかの心理学者が言つてたけど、人の行動を疑うのは自分にやましい気持ちがあるからなんですって」

明らかな敵意を籠めて、主人に嫌みをぶつける。私に反論されなんて思つてもいなかつたのだろう。グッと口唇を引き結んでソファから立ち上がる。

「夕食は？ 簡単なもので良ければ作りますけど」
返事は分かつていて。

「いらん。もう休む」

思つた通りの言葉を残して、主人はリビングを出て行つた。

いつもより大きな音を立てて閉まつたリビングのドアを見つめ、私は佐山さんと過ごした楽しい気分が消え去つていてを感じていた。アルコールのもたらしてくれる酔いも、すっかり覚めてしまった。

今寝室へ向かつても、氣まずい空氣の中、主人と一緒にいなればならない。それに、こんなに気持ちが荒れていっては眠れそうにない。

私は大きくため息をつくと

「ストレスは、発散しないとね」

今夜は、どこコンビニにしよう？ 頭の中で周辺にあるコンビニを思い描きながら、流しの下に仕舞つてあつた小さな袋を手に取

る。

「新しいスイーツが出るって言つてたわよね、確か。あそこのお店にしようっと」

気分を落ちさせるためなのか、それとも盛り上げるためなのか。自分でも良く分からぬまま、口から飛び出す独り言が止まらない。財布と袋をバッグに入れ、そつと玄関を出た。すっかり静まりかえった町の中を、自転車で走り抜ける。顔に当たる夜の風が心地よい。

うちから一番遠いコンビニの前に自転車を停めた。もう真夜中近いというのに、煌々と灯る明りが眩しい。夜道を帰る人にとって、この光は安心を与えてくれるものなのだろう。

店内には店員を含め、三、四人の姿が見える。私はそつと店先に並べられたゴミ箱に近付いた。

バッグの中に入れた指先が、力サコソと音を立てる袋に触れる。クシャクシャに丸めたソレを、様々なゴミ=不要品であふれかえる箱の口へ突っ込んだ。

『不要品』。そう、私には不要なモノ。必要のないモノ。私の中から湧き出していく不要なモノを、私から切り離して捨てるのだ。雑誌や新聞紙、食べ物の容器や包み紙、油脂のシミや泥にまみれたゴミと一緒に。悪意を籠めて。

心なしか、胸の奥が軽くなつたような気がする。お店で気に入つた雑誌と新作スイーツを買い求め、夜道を再び自転車で走る。

「不要なモノは捨てましょ。集めて、丸めて、ゴミ箱へ。焼いて、燃やして、きれいサッパリ消し去つて。気に入らないモノなんか、まとめて捨ててゴミまみれ」

歌うように節をつけて呟く。

佐山さんは知らない。私が、どれだけ深い闇を抱えているのか。

今はもう、チアートを作つてはいない。今私が作るのは、自分の心をなぐさめるための、心に溜まり続けていく怒りや不満を吐き出すためのモノ。

先程のコンビニに捨ててきた袋の中には、紙ねんどで作った稚拙な人形。精巧である必要はない。肝心なのは「人の形をしている」事。

洗濯物の力ゴに放り込んであつた主人のシャツ。それに付着していた、私のものではない長い髪を集め、数本を仕分け用の小さなビニール袋に保管しておいた。

人形を作る時に、一本ずつ髪を紙年度の中に埋め込む。そうして、人形は私にとって「あの女」になる。

興信所を使って調べさせた。主人と付き合っているのは、主人と同じ部署で働く女だつた。直接の部下ではないけれど、同じフロアに勤務している。

そう、私より若い女。私と違つて、子供を授かる可能性のある女。主人が子供を欲しがつていては知つていた。彼女が妊娠でもすれば、主人は大喜びで私を捨てるだろう。私がゴミ箱に捨てた、紙ねんどの人形のようだ。

正直に言つて、自分の中に主人への愛情が残つているのか、この行動が愛ゆえのものなのか、分からぬ。

それでも私は、主人と相手の女を許す気にはなれない。

確かに私達夫婦の関係は冷え切つてしまつていた。だけど、その関係を修復するチャンスがなかつた訳では、ない。あの女の存在さえなければ。

二人の写つた写真を切り抜き、カッターでズタズタにした事もある。ボールペンのインク一本を使い切つて、真つ黒に塗り潰した事も、余白の部分に呪いの言葉を書き込んだ事もある。

でも一番心がスッキリしたのは、人形を使った時だ。

あの女に見立てた人形を何体も作つた。女の髪を埋め込んだ人形。丹念に、時間をかけて、壊してあげた。

両手両足を切り落とし、胴に針を刺し、首をもいだ。両目の部分をナイフでくり抜き、火の点いたタバコを押し当てる。生ゴミの腐汁をなすりつけ、犬のオモチャにさせた事も、早朝のゴミ置き場で

カラスに突かせた事もある。

魂のない紙ねんどの人形が、それでも悲鳴をあげているみたいでスッとした。

佐山さんからの情報は、実際、とても役に立つた。あからさまに隠そうとして、普通でない事をするから立つのだ。なるべくさりげなく、その他のゴミ達と同じように捨てる。

この時に注意しなくてはいけないのは、まとめて出さない事。小分けにして少しづつ、何かのついでに捨てたと思わせるくらいの量で。

そうする事によって、捨てたモノの中身を探られるリスクも減るし、何より私自身が長く「ストレス発散」を続ける事が出来る。

このヒントを与えてくれた「深夜のゴミ捨て犯」には、本当に感謝している。顔も知らないどこかの誰かは、きっと私に似た人物なんじやないかと、親近感すら覚える程だ。

自宅に帰り着き、リビングのソファでゆったりとくつろぐ。買つてきたばかりのスイーツをテーブルに置いて、しばらくの間目を閉じる。

あの女の分身と化した人形が、ゴミに紛れ、不要品と共に焼却される様子を思い描く。

油で汚れたお弁当の容器や、食べ残しのこびり付いたトレー、丸められたティッシュ、泥だらけの足跡や得体の知れないシミに覆われた雑誌、新聞紙の詰まつた狭い箱の中にあの女はいる。

私にとつてはゴミも同然。私の人生に必要のない存在であるところの、主人の不倫相手。肉体を傷付ける事は出来なくても、その魂を汚す方法はいくらもある。

絶対に妊娠なんてさせてやるもんか。二人が幸せになるなんて、許さない。

黒い喜びを噛み締めながら田を開き、スイーツを一口含んでみる。チョコレートの甘さとココアパウダーの苦味が口の中で溶け合い、心地よい香りが広がる。

この楽しみだけは誰とも共有する事は出来ない。私だけのものだ。ふと目をやれば、主人が放り出して行つたネクタイが。そして布地にからみつくようにして、私のものではない長い髪が。

お行儀悪くスプレーを口にくわえたまま、私はかすかにウェーブがかつたソレをつまみ上げた。

「あらあら、これでまた人形の材料が増えたわね」自分自身に向けて呟くと、指先で丸めてビニールの小袋に落とした。

「次は、どんなふうにしたら面白いかしらね？」

洋酒の香りが鼻をくすぐる甘い菓子を食べながら、私は浮かんでくる笑みを止められずにいた。

『ゴミ捨ての犯人が分かつたの！』と佐山さんから連絡が入ったのは、それから一週間程経つたある日の午後。

慌てて『仕事あがつたら電話ちょうどい』とだけメールを打つた。彼女から携帯に電話が入つたのは、メールを送つて一時間くらいしてからだった。

『ようやく誰だか分かつたのよ！』

開口一番、興奮した様子の佐山さんが言う。

「さ、佐山さん、落ち着いて。詳しく教えてよ。私も気になつてるんだから」

電話の向こうで、佐山さんが大きく息をしたのが聞こえた。落ち着くために深呼吸でもしたのだろう。

話をまとめると、こうだ。

不気味なゴミを捨て続ける不届者にいい加減しごれを切らした店長が、本部にかけ合つて防犯カメラを設置したのだと言う。

数日、ゴミ置き場を録画したところ、夜中に入目を気にするような大きなビニール袋を持ってくる人物の姿が映されていた。

店長と、事情を知る佐山さんが映像をチェックする。数回にわた

つて録画されていた人物は、店長も佐山さんも良く知っている相手だった。

『半年前まで、うちのお店に勤めていた人なのよ。辞めてからも、何度も買い物に来てたんだから。もう、何だかショックで』

聞けば、コンビニの仕事を辞めてすぐの頃、ご主人の不倫が判明し、その事に悩んで病んでしまったのだとか。やり場のない怒りを吐き出すために人形を破壊し、自宅近くの『ミニ集積所にソレを捨てる訳にもいかず、コンビニに持ち込んでいたのだと語ったそうだ。』

『お店としても迷惑だから、一度とこういう事はしないように、つて約束して帰したのよ。知ってる相手だし、話を聞いたら警察とかに連絡するのもねえ？ 大体、罪になるのかどうかも分かんないし』
佐山さんの話を聞きながら、私は流しの下に隠したビニール袋の事を思った。そして、その袋の中に入っているモノの事を。これではもう、そこのコンビニに捨てに行く訳には、いかないわね。どこかもつと、遠いお店を探さなきゃ。

まだまだ私の「ストレス発散」は続きそうだもの。こんな事で止める訳にはいかないの。

それにしても。

と私は考える。

人間って、やっぱり同じような事をするんだわ。思つた通り、私とその人はとても似ている。だけど、私はもつと上手くやるわ。見つかつたりしないように。

そのためには、お店選びが大事なの。

うん、うん、と佐山さんの話に相槌を打ちながら、私は新規開拓のコンビニを求めて思考を巡らせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0041r/>

コンビニ夜話

2011年8月10日03時16分発行